

古今襍考

上

口 7  
3223  
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1



明八波  
番 969  
2



門口 7  
號 3223  
卷 2

古今妖魅考二之卷



平篤胤輯考

人 門

山城國 江戸爲史

常陸國 竹來道彦

武藏國 森田昌成

校 同



上、件記されある外、<sup>アキ</sup>形を數の僧名を舉られと依ぐ。其は姑  
く置て。早く寶物集も。慈惠僧正は行業の高うましも。延曆  
寺小執を止免て。金色の天狗を成まじと見え。

此僧の行業は高うまし事ども。諸書小見えある中小。今鏡  
九卷。まゝ十訓抄れせふ。大内めて五壇は御修法勤られけ  
る小。慈惠は不動尊とあり。寛朝を降三世と現じて。少も本



尊小替らばなり。圓融院正しく此事を御覽せられり。藤  
と見え。はく著聞集。十訓抄など。雅縁阿闍梨といふ人。慈  
惠僧正。濫行肉食の人。多る由云り。慈惠深く憤て。  
三寶を祈りし。は。雅縁阿闍梨三塔を走り回て。淨行持  
律の人。空言を申し。依報とて。狂歩行り。依とも有り。  
下小舉る雲景。が未來記。愛宕山に集ひて。世を亂さむと計  
する釋魔の中。此僧も交て在り。其は我慢勝他の宿執を  
引きて成れる。と。祇園を天台末寺と成る。一事。故以て  
も辨ふ。はく。

祇園を天台末寺とせ依事。今昔物語集。祇園をもせ

山踏寺。末寺。有る。依。比叡山の末寺と成れ。其故  
を。比叡山の末寺。蓮花寺といふ寺あり。然る小祇園の別  
當。良筭といふ僧有け。勢徳有りて。世間叶々僧あり。  
彼蓮花寺。堂の前。紅葉の有る。依。十月の比。色。微妙  
なれ。良筭を折取り遣り。蓮花寺に住僧制して云。  
く。祇園の別當。徳人。坐せども。何て。天台末寺の内。を  
依木をば。心。任せて。按内も。折らる。依。極。非  
常。此事あり。良筭。使。加。制。せ。ら。ま。折。ら。返。り。て。此  
れ。む。云。へ。む。良筭。大。き。小。嗔。て。此。云。ら。は。其。木。皆。伐。て  
て。來。れ。と。云。て。從。者。共。を。出。し。立。て。遣。り。然。る。小。蓮。花。寺。に



住僧を定免て良筭が從者を遣せて。此木を伐せむばら  
むと悟て。良筭の從者共の來ぎ依前小住僧みぢら其  
紅葉の木茂根際よて伐臥せてりて。然れを良筭が使行て  
見る小木を伐てりれた。返て良筭其由茂云らむを彌  
嘸りゆ。此間横川の慈惠僧正。天台座主と志て。殿下の御修  
法して。法性寺小在る小蓮花寺の僧木を伐るは小。法  
性寺小急ぎ參て。此由座主申れば。其時座主肩  
を竝ふる人無りむは。大嘸りて良筭を召し遣り  
小良筭我を山階寺末寺の司あり。何の故ぞ天台座主我  
を心へ任せて召べきぞと放言して。參さるれを。座主彌

嘸て。山此所司を呼下して。其茂もて祇園の神人ら代人  
等也。延曆寺小寄ける寄文字書儲りて。其小判を加戸よと  
押責りれを。神人ら責られ侘て。判を加へてりて。其後座主  
今小於ては。祇園を天台山の末寺なり。早く別當良筭を追  
却まほしと云て追せり依る。良筭敢て事ともせ交。公正。  
平致頼也。以ふ兵の郎等とも茂雇ひ寄せて。楯を儲りて。軍  
を調へて待りる間。座主此由を聞て彌く嘸て。西塔の  
平南坊といふ處小住りる。睿荷と云りる僧を。極る武藝  
第一の者なり。はと彼致頼が弟小。入禪といふ僧在り。極  
る兵あり。此二人を祇園に遣して。良筭を追しむる小。此



二人彼處カレコに至りて。良筭リヤウサンが儲タカる軍兵小向て云く。汝ら濫ミカリ小箭コヤを放ちて悪事を致さば。後の爲アトり悪アセりてあむと誘アソビり依ヨり。良筭リヤウサンが雇ヤトへる致チカ頼レンが郎等ロウトウども。入イ禪ゼンを見て。早ハヤう山の禪師殿ゼンシの御ミを依ヨりあそ有アリりまを云て。後の山ヤマを逃ニゲ去サリ小けまは。心ココロに任マカせて。良筭リヤウサンを追却オウキしてりて。然シカむ睿チ荷カを別當ベツトウに成ナして執行シヨウギンさせりる小。其後山階寺サンカイスに大衆オウシュウ發ハツりて。公家小訴ウタへ申マウにやう。祇園キエンを往イニシ古コよシ山階寺サンカイスの末寺マツラあり。何ナニでう恣オシに延曆寺エンリキ小押取オシトらまむ。速スサハに本ホノの如ニく。山階寺サンカイスの末寺マツラと為ナる由ユを仰オホ下サさ依ヨべしと。度タクく訴ウタ申マウりる程ハジり。御裁許ミサイキョに遅オソく那ナりれむ。山階寺サンカイスに若ニガき大衆オウシュウ京上キョウジョウして。勸學院コンガクインに著ツキ

けり。公キミ聞キ食シし驚オドロきて。御沙汰ミサタ有アルべかめり依ヨり。其前小彼座ミマエカゼ主ヌシ慈惠ジイ僧ソウ正シヨウ失ウシりりて。然シカて其沙汰ミサタ明日アシタ有アルべしと既スデに仰オホ下サされりる小。山階寺サンカイスの大衆オウシュウを。皆ミナ勸學院コンガクイン小在アルりる小。其寺ミテに中ナカ筭サンは。宗ムネと此コノ事コトを沙汰シタすべき者モノにて有アルける小。勸學院コンガクイン近チカにコイヘ小家カ小宿ヤドして居イり依ヨり。其夕スヤさり方カタ。前マヘに弟子シシ共トモおど數アツク居イるを。俄ニガに中ナカ筭サン只タ今イマ此コノ人ヒト來キらむと云イハふ。某コノ達タチ志シはらく外ソトにア出デよと云イハるまは。弟子シシ共トモあ去サリり依ヨ程ハジり。人外ヒトソトよア入イ來キ依ヨりも見ミえぬ小。中ナカ筭サン人ヒトと物語モノガタリりる音ネの聞キりれむ。弟子シシども恠オソと思オモひる程ハジり。暫シバシバ許ヨリあてて。中ナカ筭サン弟子シシどもを呼ヨりれむ。皆ミナ出來デりける小。中ナカ筭サン此コノ山ヤマの慈惠ジイ僧ソウ正シヨウに御ミに



於ると云けられ。弟子ども此を聞て。此を何小宣ふ事ぞ。慈  
惠僧正を早う失ゆし人をばと思われども。怖くて物も云  
ぢて止りり。然て明る日此沙汰有ける。中箒風發と  
と云て。沙汰の庭より出ざりまは。山階寺の方。指せる  
由沙汰を家人無さるる小依て。其御裁許切ざりられ。大  
衆も返下あとして。遂に祇園を。比叡山北末寺小成畢と  
る也。由れは良箒が悪事よと發る事あれども。此を思  
ふ。慈惠僧正に強く執せる事小こそ有ぬ。失ありられ  
ども。其靈の中箒小乞請られ。中箒は俄に風發とて  
出ざり。依りあそ。中箒出て沙汰せましかむ。何うは有ま

し。然れを其後知て。慈惠僧正の靈も。行て乞請とる。よあそ。  
中箒は只今小を非ざりゆと。弟子共も此を聞く人も。皆  
知りり。と有也。

陸奥國の女が。法華經を知らず。歎けぬ。良源の白骨比頭の  
舌はうと活ぬるが。女れ家の天井小來てて教ふるも。我執に  
魔事あり。

そは西行法師が撰集抄小。陸奥國平泉郡捌といふ里。坂  
芝山と云。山あり。其邊の河端。高さ一丈餘あり。石塔を立  
て。針貫たまはし。草拂あり。此は何れ事小くと  
尋ぬれ。中おろ此里小猛將あり。其女ある者。法華經を讀



ありれど。教ふべき者なりしとて。朝夕歎きて過るる小。或時  
天井の上より聲ありて云。やう。汝經を求めて前小おけ。我此  
小居て教へむと聞ゆ。怪く思あがら。經を得て前小置る  
る。天井此上りて。ゆゑしに聲おて教へけ。八日と云りみ  
れ習終るぬ。此女いりある態知らむと。最怪しく覺えて。天  
井を見ゆ小。白くゆき苔生くる首小。舌此活くる人此如く  
ある有り。此白骨の教へゆよおそと思驚きて。此を誰おて  
う御らむと。強り尋ぬるとに。我をこれ延暦寺に昔の住侶。  
慈惠大師の首あり。汝が志を感じて來て教へめ。急に我を  
坂芝山に送きと有りれむ。哀よ忝きあとに覺えて。泣く此

山に納めて。此の如く塔婆あどせるが。此頃までも山中小。  
貴妃御經に音する折も侍り。ゆて此女を尼小あてて。此山  
中小菴を結ひて。思はまして在しが。此二十餘年さきに往  
生しとて。其菴に形今小あり見よと云ふ。彼人と伴ひて見  
るよ。口三間ある屋の形むり残りありと有る。

此を良源法師のみ知らず。和漢の法師も。舌のみ死せむて。經  
を讀誦しと類をいと多りれど。一切法は著せるを。法智魔  
と謂ふや。ある魔事ある物なや。序に此方小此事の有し。尚  
記さば。古今著聞集に宿執篇小。壹睿といふ僧有り。多年法  
花經に歸して修しと。紀伊國穴背山に至りて宿しりる。



夜子。其人を見せりて。法花經成よむ聲聞えりり。一部讀終りて經の聲止め。怪く思て。朝子其程を見る小。年序經よる白骨あり。更子分散せざし。正體これ續きあり。其髑髏の中舌あり。壹層髑髏小向ひて。其因縁を尋ぬせむ。舌答りて云く。我はあれ叡山の僧。名をは圓善と云た。修行の間此山に至りて。天に。前生り法華經六万部讀奉らむと願を起して。生分を既り終り小あり。計らげざる小生を隔ちと云へども。其願を誦滿せむが爲子。猶誦ほるあり。今年已に讀終りて。正に歿卒の内院に生さべしと云り。壹層此事成聞て。禮拜して去みけり。此の如き例多し。靈異記小も。熊野山。金峰山あど小。誦經此

髑髏有る由見し。此等みか執の深き至りありと見也。

信子靈異記。阿部天皇の御世小。紀伊國牟婁郡熊野村小。永興禪師といふ僧有り。人其行を美めて。都より南ある國の人故り。南菩薩と稱ひき。此が許に來て仕る僧の山小入て行せむと云ひて。麻繩二十尋。水瓶一口成持て別去。二年成過て熊野村の人。熊野河上の山に至りて。樹下伐て船を作り。舟に法花經を讀音あり。月日成累ぬる小猶止まば。貴く覺えて山深に尋ぬる小見え。還りて永興并云。予は。并怪み往て聞く小聲あり。尋求て見れば。一の屍骨あり。麻繩をもて二足成繫き。巖に懸り身を投



て死カスラり。其傍カスラに水瓶あり。此をもて別去れる僧あり。事を知り。悲哭して還カヘる。三年後還て山人告云く。讀經の音今止まじと。并マまゝ往て其骨を取らむと將て。髑髏を見れむ。三年小至りて其舌腐クサぶ。苑然として生有イキナリり。まゝ吉野金峰山に一禪師あり。峰ミネを行て行道を修ユクサキる。往前マカに法花經。金剛般若經を讀む音あり。草中オシヒラに排開き見れむ。一ツの髑髏あり。久しく歴て日小曝サシくむ。其舌爛れクダき生著て有り。禪師をキキ淨處トコに取收めて。草を以て其上を草覆フキオホひ。共ニに經を讀ミて六時ミに行道。禪師が法花經を讀むミに從シひ。共ニに讀む故小。其舌を見れむ。舌振動フリウギと有り。此永興禪師が事は。今昔

物語集ナも見えス。そは靈異記を取れるナ依ホべし。猶言は。今昔物語集ナ。春朝持經者ス顯ス經驗語ナとある條ナ。今昔春朝と云ふ持經者ス有り。日夜ニに法花經を讀誦して。棲シマを不定サダメして所ニに流浪して。只法華經を讀誦し。心ニに人を哀アヒみて。人の苦クシむ事ヲ見ては。我が苦クシむと思ひ。人の喜ヨロコぶ事ヲ見テは。我が樂ウレシむと思ふ。然る間ニ。春朝遂ニにコ行き宿ヤドる棲シマ死シして。一條に馬出の舎ニに下リして死シり。髑髏ツケを其邊ニに有リて取リて棄ス人死シ。其後その渡ワタリ人夜聞クく。毎夜ヨゴトに法華經を誦スる音コト有り。其邊ニに人等ヒト此を聞て。貴カむ事ヲ无限ナシ。然れども誰人の誦スると不知シラして。怪アヤシむ思フ間ホト。或ハ聖人出來て。



此、鬪體を取て、深き山に持行て置り。其後此經を誦じ、  
音絶ぬ。然れど其邊の人、此鬪體□□誦けりと云、事を知  
小りと。春朝上人をば、只人子非交權者也。とぞ其時の人云  
けると有るは、甚よく類する事共ありかし。

靈異記。右の事、記せる末、諒知大乘不思議力、誦經積功、  
驗徳也。贊曰、貴哉受血肉身、常誦法華、得大乘驗、投身曝骨、而鬪  
體中著舌不爛。是聖不凡矣。と云へども、悉く釋魔小率られ  
し宿執の爲に處りて、中おも兩足を繫ぎて身投するは、  
謂ふが如く殊に炳き、大乘に忌むべき験あるを、是聖不凡と  
貴記事小云ひ思ふ。佛者の心をか正異しき物を無りり。

然るは西行法師が撰集抄も、慈惠大師のちき首也。經誦  
と依事を記せる末、かゝる例は有難く、かき聞さ依く  
心地して、物も覚えぬと書り。此法師も、佛法の事とし云  
す。何とも那き事も涙を落さ。元よ泣頰は法師あれ  
ば。然も有べた。此外の書共も、かゝる依事をば、いを貴け  
小記せるを、傍いし記事あり。然るに著聞集のみ、此類を  
宿執篇に記して、由れき事小思へる状を依を、見高き撰者  
ありり。○序小言はむ。西行を法師の多うる中おも、歌作  
りぬる故に、物の哀を知る顔して、撰集抄に記せる事ど  
もを見れば、おや、物も那き出むとせら依く、拙き事を



し泣<sup>ナキツラ</sup>煩<sup>ワザ</sup>して記<sup>キ</sup>し。名聞<sup>ナキツラ</sup>宿執<sup>シュクシツ</sup>あどの筋<sup>スヂ</sup>をいせ。淨<sup>イサキ</sup>よく失<sup>ウシ</sup>ひ畢<sup>ハテ</sup>ある様<sup>サマ</sup>子云へまども。宿執<sup>シュクシツ</sup>の心<sup>ココロ</sup>をいと深<sup>フカ</sup>くぞ有<sup>ア</sup>りる。其<sup>ソノ</sup>を著<sup>カキ</sup>聞<sup>キ</sup>集<sup>ミ</sup>ふ。是も宿執<sup>シュクシツ</sup>篇<sup>ヘン</sup>子。西行<sup>サイギョウ</sup>法師<sup>ホウシ</sup>出家<sup>ウチガ</sup>よ前<sup>サキ</sup>を。徳大寺<sup>トクダイジ</sup>左大臣<sup>サダメノ</sup>此<sup>コノ</sup>家人<sup>カネノ</sup>みて有<sup>ア</sup>りり。多年<sup>タネン</sup>修行<sup>シュウギョウ</sup>のち都<sup>ミヤコ</sup>へ歸<sup>カヘ</sup>りて。年<sup>トシ</sup>ごろの主<sup>ヌシ</sup>君<sup>キミ</sup>不<sup>フ</sup>ておちん睦<sup>ムツ</sup>しさふ。公衡<sup>キョウコウ</sup>此<sup>コノ</sup>中將<sup>チュウショウ</sup>の許<sup>モト</sup>へ尋<sup>タツ</sup>ねて伺<sup>カガミ</sup>ひ見<sup>ミ</sup>れむ。縹<sup>ハナダ</sup>の白<sup>シロ</sup>裡<sup>ウラ</sup>此<sup>コノ</sup>狩衣<sup>カリギヌ</sup>子。お正<sup>マサ</sup>物の奴<sup>サシ</sup>袴<sup>ズキ</sup>踏<sup>フミ</sup>くくみて。庭<sup>ニハ</sup>此<sup>コノ</sup>櫻<sup>オウ</sup>を詠<sup>ユ</sup>めて。高攬<sup>コウラン</sup>子寄居<sup>ヨリヂ</sup>する状<sup>サマ</sup>いと優<sup>ユ</sup>ふて。徳大寺<sup>トクダイジ</sup>の御<sup>ミ</sup>跡<sup>アト</sup>を。此<sup>コノ</sup>人<sup>ヒト</sup>小御<sup>コノミ</sup>りと思<sup>オモ</sup>ひて。左右<sup>サユウ</sup>あく櫻<sup>オウ</sup>の本<sup>ノ</sup>子立<sup>タテ</sup>寄<sup>ヨ</sup>り置<sup>キ</sup>れば。中將<sup>チュウショウ</sup>いりぬる人<sup>ヒト</sup>小<sup>コ</sup>うと尋<sup>タツ</sup>られりる。西行<sup>サイギョウ</sup>と申<sup>マシ</sup>者の參<sup>マシ</sup>りて候<sup>ケ</sup>と申<sup>マシ</sup>れむ。年<sup>トシ</sup>おろ見<sup>ミ</sup>參<sup>マシ</sup>る。かまらぬ。

殊<sup>コト</sup>小悦<sup>コトヨロヒ</sup>給<sup>タマフ</sup>ひて。椽<sup>スサキ</sup>の上<sup>ノ</sup>小呼<sup>コヒノボ</sup>上<sup>ノボ</sup>せて。昔<sup>ムカシ</sup>今<sup>イマ</sup>此<sup>コノ</sup>事<sup>コト</sup>語<sup>カタリ</sup>られりる。日<sup>ヒ</sup>やうく暮<sup>クレ</sup>小<sup>コ</sup>りれむ。西行<sup>サイギョウ</sup>は歸<sup>カヘ</sup>りぬ。其<sup>ソノ</sup>後<sup>ノチ</sup>常<sup>トコ</sup>小<sup>コ</sup>參<sup>マシ</sup>りて物<sup>モノ</sup>語<sup>カタリ</sup>あり。かゝ依<sup>ヨ</sup>程<sup>ジョウ</sup>子。任<sup>マカ</sup>大臣<sup>テイジン</sup>有<sup>ア</sup>べしと聞<sup>キ</sup>えり。藏<sup>ソウ</sup>人<sup>ニ</sup>頭<sup>トウ</sup>子彼<sup>カノ</sup>中將<sup>チュウショウ</sup>此<sup>コノ</sup>成<sup>ナリ</sup>べき仁<sup>ニ</sup>當<sup>タウ</sup>り給<sup>タマフ</sup>ひりる。院<sup>イン</sup>を中將<sup>チュウショウ</sup>成<sup>ナリ</sup>經<sup>キョウ</sup>朝<sup>テウ</sup>臣<sup>シン</sup>を成<sup>ナ</sup>さむと思<sup>オモ</sup>食<sup>シ</sup>し。殿<sup>テン</sup>下<sup>ノ</sup>は大藏<sup>ダイソウ</sup>卿<sup>ケイ</sup>賴<sup>ライ</sup>宗<sup>ソウ</sup>朝<sup>テウ</sup>臣<sup>シン</sup>依<sup>ヨ</sup>推<sup>ツイ</sup>舉<sup>キョ</sup>めり。まむ。兩<sup>リウ</sup>關<sup>カン</sup>也<sup>ヤ</sup>も小<sup>コ</sup>叶<sup>エフ</sup>まじげ小<sup>コ</sup>聞<sup>キ</sup>えりるを。西行<sup>サイギョウ</sup>聞<sup>キ</sup>て。いそぎ中將<sup>チュウショウ</sup>の許<sup>モト</sup>子詣<sup>ヨミ</sup>で其<sup>ソノ</sup>由<sup>ユ</sup>を語<sup>カタリ</sup>りて。人<sup>ヒト</sup>越<sup>コ</sup>られ給<sup>タマフ</sup>ひあは。定<sup>サ</sup>めて世<sup>セ</sup>を遁<sup>ノ</sup>れ給<sup>タマフ</sup>む。むらむらど申<sup>マシ</sup>り依<sup>ヨ</sup>字<sup>ジ</sup>。中將<sup>チュウショウ</sup>聞<sup>キ</sup>て。誠<sup>マコト</sup>小<sup>コ</sup>ま。あそ有<sup>ア</sup>る。まども。母<sup>ハハ</sup>尼<sup>ニ</sup>堂<sup>ドウ</sup>を立<sup>タ</sup>べき願<sup>ガヒ</sup>有<sup>ア</sup>て。其<sup>ソノ</sup>間<sup>マ</sup>の事<sup>コト</sup>を申<sup>マシ</sup>付<sup>ツ</sup>く。出家<sup>ウチガ</sup>此<sup>コノ</sup>身<sup>ミ</sup>小<sup>コ</sup>て口<sup>クチ</sup>入<sup>イ</sup>せむ事<sup>コト</sup>。勸<sup>カメ</sup>化<sup>ケ</sup>法師<sup>ホウシ</sup>小<sup>コ</sup>似<sup>ニ</sup>らむ。むらむら



は。其願とげて後小計ふべしと答らまけれむ西行心おと  
して歸りぬ。任大臣の於いで小聞えしが如く。成經朝臣  
藏人頭小補せられふりて。其朝西行弟子を中將の許へや  
りて。若やとて事がらを見せりる。敢て日來ヒゴロ替カハる事無  
ざられむ。又ふみを持て。申候し事をいりおと尋ウラナひり  
小。見參れと記委く申べしと返事せられりまば。無下の人  
りて御オホシりりやて。其後を向ムカはぶ成ナリりて。世ヨを遁ノれ身を捨ス  
ふれども。心を昔小かはらぶ。達ダテくし有アリけるゆめと有り。聖  
人ジリガホ見はまれども。五蘊六塵の宿執魔縁を去サリ取アざるまとは。  
是をもて知チべし。

ゆき上カミに舉アゲぐる四大師を更あり。叡山の中興と稱イハれし人  
ら。右小記より如く。憍慢宿執。名利勝他。此魔念マノ淡ウカ有リしうば。其末  
派門葉の僧徒。此魔縁を引ヒくは。一人も有アらばこと。前サキ小  
記せる道昭法師が靈の語コト。天竺震旦本朝。名を得ユくる貴  
僧高僧。此魔道マチ落オつる類タビを勝マて計カふは。うらまと言イひ。下シ  
舉アゲる開發源大夫住吉と名告ナれる鬼モリの語コト。諸宗の宜ヨしき法  
師シを。皆ミナ天狗テンクに成ナれる故ユ。其數を知らぶ。大智オホチ此僧を大天狗  
とあり。小智の僧を小天狗とあり。無智の僧を畜生道カに墮オち  
六十餘州アヒ此山峰ミ。或アは二三十人。或アは五十百二百人。天狗の  
集アらる處トコロあり。と言イへる。う思オモひ合アせて辨ワべし。



此の開發源大夫住吉といふ物の語を。第四卷小そ此全文  
を引て論ふを見るべし。

抑大智此僧の大釋魔と成也。小智此僧の小釋魔と成て。人字  
誑惑し。世を騷亂せしむる事は。上も下も記し辨ふる如  
くあるが。謂ゆる無智の僧也。畜生道に墮するは。多く屎鳥を  
成りて。是を釋子此因を引き。隨分の幻果を得て。種々の變  
相を現じ。世をも人成も誑うる物もぞ有り。其をまた鷲と  
鷲とは一類の物なりて。鷲ハ鷲の大きき猛き物。鷲ハ鷲此小き  
く怯き物なり。形も類する故也。古くは鷲字鷲とも云へり。然  
依を神世也。天日鷲翔矢命といふ也。鷲を掌給ふ神を聞え。始

矢て弓を製す。弓削氏の祖ある謂小よ弓なり。矢小鷲の羽を用  
ふる也。天照大御神也。天岩屋小幽居し。時弓六張を竝べ  
て琴と成て。其子長白羽命小奏しめ給へる。其時。金色の鷲  
高幡の上居ありと有也。やがて天日鷲命の暫く化すると  
通也。此は鷲を化すべき也。鷲とあるは。形の類するを言ふ也。小  
て。此縁小よ弓なり。天日鷲命をま。天金鷲命とも申せ也。  
琴弾く上。金色の鷲と化て來れる。此れ鷲尾琴を製れる  
事本あり。ま。神武天皇也。大和國に征入り給ふ時。金色  
の鷲。御弓に弾小止れと有也。天日鷲命の化して。あて。鷲  
あるは。覺也。此を古史傳に委く考す記をを見へし。



但し此を神の御態あるを釋魔の鷲此形を現じしは亦た寶物  
集小東大寺此一番の別當良辨僧正を相摸國の人なり。三歲  
此と記父母懷き出して愛せるを金色ある鷲來りて抓去り  
ぬ。父母悲むと云へとも空小消えて失せぬ。鷲ハ大和國春日  
山ある木の空小置て是を養ふ。此子日成歷年積りて物の心  
付く程小佛法を修行す。人は子金鷲仙人と名付く。

此事今昔物語古事談佛法傳通緣起など小見えて金鐘行  
者ともありはは元亨釈書小を釈良辨姓百濟氏近州志賀  
里人其母祈觀音像而得二歲時母桑焉置兒於樹陰忽大鷲  
落捉兒而去母悲望趁鷲而往不歸家初南京義淵詣春日神

祠見鷲鳥于野將小兒也鷲見入而避淵收而歸甫五歲就學  
聞一知十云くと見えまゝ大山縁起と云書し良辨者相摸  
國鎌倉郡由伊郷人也俗姓漆部氏當國良將漆屋太郎大夫  
時忠子也母未之聞也云く時忠年泪四十無胤子遂就幽冥  
禱是或夜夢有一高僧來告曰汝所請求我哀之授一卷亦曰  
我是靈山釈迦斯妙典弥勒菩薩也時忠夢中嬉懼甚即披而  
閱之法華經第一卷也如言告妻妻曰今夜妾亦夢夢狀相同  
無違矣夫婦感夢知其有子既而有身遂生一男父母以爲匪  
凡人育之鍾愛尤切歷五十日乳母提携遊觀園中金色鷲不  
意飛來擊其兒入雲矣云くとあるを以て金色鷲の佛魔を







せる始る。

此事は巫學談弊。東大寺建立此事を論へる處。委  
く辨へしれむ。此は天畧を云あり。義楚六帖云。西域記云。  
靈鷲山似鷲鳥。有靈多集。故名靈鷲。峰聳類臺。故云鷲臺山と  
いひま。法顯傳云。祇園屈山有大石室。阿難入定。魔化為鷲  
鳥來怖阿難。とあるは。由有ける事なり。ま。名義集三卷  
にも。常在靈鷲山の事を云へむ。披き見る法。因云ふ。  
抱朴子廣譬篇。小金鷲不競擊於小鷲とあり。和名抄云。唐韻  
云。鷲。大鷲也。鷲。鷲鳥別名也。山海經注云。鷲。小鷲也。鷲。和名於  
保和之。鷲。古和之と有れむ。此金鷲も黄金色の鷲を言ふ。

他漢籍云。此熟字未見當ら。猶考ふべし。

は。同書云。慈惠僧正。金色天狗と化。云云。金色  
の鷲形を云へると聞ゆ。其在雲景。未來記云。崇徳天皇の  
御靈の御形。金色鷲の形。見成し奉れるを。思ひ合せて  
辨ふ。是ま。鷲を鷲とも見成し。一證と云べし。此鷲  
正しく。佛菩薩縁有る事を。知法は。今昔物語集云。大和  
國平群郡。鷲村。岡本寺といふ寺あり。尼の住する寺あり。  
此を聖徳太子の宮ありしを。太子誓願を發して。尼寺と為  
給へり。と。靈異記小見えあり。

其寺。銅の觀音像十二體あり。而る小聖武天皇の御世。



彼像六體を盗人小取られぬ。尋求むれども得ず。其後程を経て。其郡北驛の西方に小き池あり。夏のあろ其池の邊に牛飼の童部ども在り。池中小き木指出て。其木小鷄居り。此事靈異記にも載せて。鷄を鷄まゝ鷄まゝ鷄まゝ誤れり。さて本草綱目云く。鷄似鷹而稍小也。其尾如舵。極善高翔。專捉雞雀。其攫物如射。寺嶋良安云く。鷄鴉有害無益而多有之。鳥為人所憎也。然俗傳曰。愛宕之鷄。熊野之鳥。以為神使。未知其據也といへり。良安鷄と鴉を成。共り悪鳥云へども。二鳥共り悪き中小も。あゝ世の為人此為とある事も有也。覺るを。其に此言は。儲まゝ鷄と鴉は。甚も中

悪く。鴉の鷄を責むる事は。深き由有げある事なり。

童部去れを見て。礫塊を拾ひて打つ。鷄去らば。尚居多也。然まは童部投打。事を止免て。池を下りて。鷄を捕へむ。せりる小。鷄忽ち失せて。居りりる木を。其木をよく見れた。金の指りて有り。童部怪みて。此を取て牽上る小。觀音此銅像あり。童部去の陸小牽上りて。里人此事を告ぐ。岡本寺の尼等も。此事を聞て。里人も共り來て見る小。岡本寺の觀音あり。塗る金を皆稀落り。尼ども觀音を圍繞して。泣悲み。忽ち輦を造りて。本の岡本寺小渡して安置しり。其邊に道俗男女。集りて禮拜して。錢を鑄る盜の態あらむと云



ひき。此を思ふ。彼池小有る鷄を。實は鷄小を非ず。觀音の鷄と變じて示し給ふる也。と有を見て知べし。此事靈異記も載せられた。見合せて記し於。撰者の評小。彼池小有る鷄を。實の鷄小は非ず。觀音は變じて鷄と成まる也。とあはれを違へて。然るを觀音と云は。元よ正有名無實の佛あるが。其靈驗あは事は。釋魔の態ある小。彼池小有る鷄を。此觀音像は憑りて。其驗を示はる釋魔が。眞の形を現じて。盜人の爲す。池小隠れれて在る由は示せ給ふる。觀音の靈驗といふは。皆こは類あり。かく論ふをも。疑をむ人は爲すれ不言は。源平盛衰記小。文覺を渡邊黨小。遠藤左近將監盛光が一男。上西門院の北

面の下臍あり。其母いまづ子あり。夫妻共は家の絶ふ事を歎きて。長谷寺の觀音に詣り。七日祈り申され。左の袖小鷄の羽を給ると夢に見て。懐妊して儲けける子あり。父を六十一。母を四十三りて生れくる一男あり。觀音は。天狗あると元よ正は。其一羽を別りて。まはし子は魂とは爲せるあり。母は難産して死に。三歳の時父盛光も死去。十八歳あて。系惜き女小後れて髪をきり。日本一州の高き峰至らぬ地あり。七日。二七日。三七日。百日籠り行ひ。十八歳小て出家して。一十三年の間。山臥修行者の勤苦あり。此文覺を。天狗の法成就人



めて法師をば男小あり。男をば法師小好しなどして。現心は  
無りれれども。ゆるし荒行者もて。度々鍔金顯しする者あ  
り。心志ぶやく。身も健小志て。立ぬ願もあく。せぬ業も好し。斯  
ゆりれば。發心地。物氣れど云て請用隙れし。向と向ぬる小空  
志き事をれし。餘り小暇なき折は。念珠袈裟を遣して。病者の  
目小も見せ。手小も取せぬまを。忽ち驗を顯ちん。

觀音は右より云。如く。有名無實の物あれど。そまが靈驗とて  
種々のこまほるは。釈魔の觀音と好て有る故あり。然る  
を是が父母。その後胤れ絶むこまを悲みあむ小を。神子祈  
るまきよとあゆ小。觀音を祈れるは。時世の状れまはいふ

小ふら孫ど。觀音もし善心のもの好らむ小を。其願のぶと  
く。家を継べき子成授くまき小。天狗を授て出家せしめ。家  
れ継字絶するは。いり小天狗れ枉まる所為あらまや。

係よし加む。元來天狗根性ある上。慢心強く。高聲多言小し  
て。人をも人とせざり。依餘り小。法皇の御所小あはれて。獄  
小入らまきまはるまき。悪口止ま。遠くは三年。近くは三月。中  
り。思ひあらせ申さむ。三寶護法とて。利生を現し給へ  
と。手残合せ念珠を揉て。院御所を呪詛し奉りる小。獄中れ  
者共も。身の毛豎て覺りる。はまぢふや上西門の女院。指さる  
御惱まほしまぢぢして。隠れさせ給りり。斯て文覺を。院御



所小て悪口を吐き流罪せられ。伊豆國奈古野が奥と云所小。  
觀音れ堂あり。奈古野寺と名く。其傍小何やし死菴を結ひて。  
閑籠りて年月送り於。深く大悲れ誓願を憑みて。不退の  
行法薰修せりと見えりと。まさしく天狗の鵄と化まると  
いふ事も。同集小。讚岐國子方能池といふ。極めて大なる池あ  
り。其池子住らる龍。日小當らむと思らるるや。池より出て。人  
離るる堤の邊り。小蛇の形りて蟠り居りりり。

龍の大小變化自在なる事。和漢の書等小も記し傳へ。今  
も目れ何より。小蛇と見えりと。大龍と成りて雲を起し。氷  
を降し昇天を依を見留人。いり程も有り。然れど心狭き漢

學者は得知らて。然る事ありと思へり。

其時小。近江國比良山に住らる天狗。鵄の形と云て。其池の上  
を飛廻り。此小蛇れ蟠りて在依見えりて。鵄返下りて搔抓みて。  
遙小空に昇る。龍力強き物あれとも。思懸き。程小。俄に抓れ  
ぬれむ。更小術盡て。あが抓きて行く小。天狗小蛇を抓碎きて  
食はむと為る小。龍も力強き小依て。心り任せて抓碎こと能  
く。更して。遙に本の栖れ。比良山に持行て。狭き洞の動きくも  
非ぬ處小。打籠置れれ。龍は一滴の水も無れむ。空を翔る事  
も叶えぬ。破死て。只死あむ事を待て居る。

龍の神通自在あるも形をかく小さく變じては。其變じと



る形の量あらでは。用を成おと能をん。かく怯くて苦み居  
あそいと墓死なれ。説苑といふ漢籍に。伍員が吳王小云け  
依を。龍は魚の形ふありて。浪に戯れて浮る程。預諸と  
云もの。網を引るる懸りて。悲し死目を見て。大海に加  
へて。龍王小訟へけきは。龍王ことおきて云く。何しふ  
く魚は姿とは成り依。然れをよる網ふをかき。今よる然  
依事をまはしき也と云へる事あり。虚實ハ知ら絲と。豊臣  
太閤小。曾呂利が鬼神の夢に託して。諫めし言をも思ひ合  
せて。人を無下小。品をを落さしき物ありり也。  
而る間小。彼天狗比叡山よ行て。短を伺ひて。貴き僧を取むと

思ひて。夜東塔の北谷小在り依。高き木に居て伺ふ程。其向  
小造懸るる房あり。其房に在る僧。椽より出て小便をまて。手洗  
洗をむが為小。水瓶を持って手を洗ひ居る小。此天狗木より飛  
來て。僧を掻抓みて。遙く比良山に栖る依洞より行て。龍の在る  
處に打置け。僧を水瓶を持あから。我も非て居ると。今を限  
と思ふ程。天狗は僧を置いて去ぬ。

此所行を具し思ふは。本文小鶏と有れと。あや鷺の所行  
あり。舊く鷺と鳶とを混じり云へる也。此をもて悟るべし。  
鶏を人よ抓み去りて。碎食ふ程の事はあき物ゆて。鷺こそ  
然ること常ふあるをや。



其時小暗き處トコロ音有りて僧小問トヒケラ云く。汝イニこそ誰人トクぞ。何ナニよ  
り來コレぞと問ふ。僧答て云く。我ワレを比叡山ヒエの僧あり。手を洗はむ  
為ナリ小坊コボクの椽ケラより出デりりるを。天狗テンコ俄ニガに掴ツみ取リて。將來イナキ移シるを  
也。然シカれむ水瓶スイビンを持ツち來キたるを。抑ヨメかく云イハふを。まま誰  
ぞと云イハふ。答コタへ云イハく。我ワレを讚岐サンシ國クニ方能池ツツミに住スむ龍リウあり。堤ツツミに這ハ出デ  
るゆしを。此コノ天狗テンコ空ソラより飛トビ來キて。俄ニガに掴ツみて。此コノ洞ツツミ小將コシヤウ來キれ  
也。狭セくて為セむ方スベなく。一滴イツツツの水ノミも無ナれむ。空ソラも翔カチらぬと云  
ふ。僧云く。此コノ持ツたる水瓶スイビン。若モシ一滴イツツツの水ノミや残コリらむと云へむ。  
龍リウ此コノを聞キて喜ヨロび云く。我ワレ此コノ處トコロ小コして日ヒ來キ經ケて。既スデに命イナチ終マるむ  
と為ナるよ。幸イハふ來キ會ヘし給タマひて。互タガに命イナチを助タスくる事コトを得ウべし。若

一滴イツツツの水ノミあらば。汝イニ字ジ本ホンの栖イテ將イテ至タるべしと。僧ソウ喜ヨび喜ヨびて。水  
瓶ビン字ジ傾カりて龍リウ授サツく依ヨる。一滴イツツツ許カリの水ノミを受ウけ。龍リウ喜ヨびて僧ソウ子  
教キョウへて云く。努ヌく怖オソる事コト无ナクして。目メ成ナ塞サぎて我ワレに負オれ給タマふ  
言コトし。此コノ恩オン更ニ小コ世セくも忘ワすしと云ふ。爰ココに龍リウ忽ニギち小童コドモの形カタと  
現アれて。僧ソウを負オひて。洞ツツミを蹴キ破ヤりて出デる間マに。雷ライ電デン霹ヒ靨ツして。空ソラ陰カゲ  
り雨降アメこと甚シト怖オソし。僧ソウを身ミ振シり肝カ迷マひて。怖オソしと思オモへむ。龍リウ  
を睦ムツび思オモふが故ユ。念ネンじて負オれ行ユく程ハに。須臾スズ小比叡山ヒエの本  
此坊コノボク小至コトる。僧ソウ字ジ椽ケラ小置コきて龍リウを去サぬ。

龍リウの人語ノコトを成ナせる事コトを。漢學カンガク者ノの見狭ミき倫リンを。疑ウタふも有アべ  
りま也。神カミ小入コるときは。物モノと志シて人語ノコトを成ナさるは亦ナたを。



あや人のみぞ。物と語を通ずるおと能をば。此をよく古學  
然して辨ふべし。はく龍の水を得ては。其自在かく此如く。  
水を失ひてを。怯きおと蛭小異あらば。

彼房の人。常の霹靂して房は落懸ると思ふ程。俄小坊の  
邊暗夜に如く成て。暫許ありて見れむ。一夜俄小失し僧様  
は在り。坊の人奇異く思ひて問ふ。事の有様を委く語る。人  
皆聞て驚き奇異ぐりり流。其後。龍彼天狗に怨を報せむ為  
小。天狗を求むる。京小知識を催は荒法師の形と成て行り  
流。龍降して蹴殺してり。然れを翼折る。屎糞あてあむ。  
大路小踏れり。龍を僧の徳小依て命を存し。僧を龍の力小

依りて山小返る。此も機縁あるは。此事は。彼僧の語傳を聞繼  
て。語を傳へし流ありと有也。

但し此物語。僧の房小返りたる迄の事を。僧は語きりて  
知らるれども。其後。龍の天狗を蹴殺しし流事は。如何志  
て知りむ。此を雷電霹靂して。荒法師を蹴殺ししある。古屎  
糞と成て大路小在りるを。彼僧は物語り小思ひ合せて。加  
く語を傳へし流あり。

はく天狗の正。佛と現じし事も。同書小。延喜は天皇の御  
代小。五條は道祖神の在る處小。大なる實成らぬ梯木有りり。  
其木の上。俄小佛現れし流事は有り。微妙き光を放ち。様



様の花を令降おどして。極めて貴かざりれむ。京中の上中下  
此人。詣集る。其を限おし。車も去敢えかく。喰る布ど。既小六七  
日小成りぬ。

此より據りて思ひ合さぬ。事あり。其を万葉集よ。玉葛實成  
らぬ木小は千早振。神を扱くとふ。乃らぬ木おと小。其有る  
は。かゝる事を詠るあり。實はらぬ木とは。柿栗桃などの類  
の。實は成べき木。乃て實はらぬを云ふ。然れど實の形るを。  
此樹ども此常小。成はき實の成らぬを變あり。其常あら  
ば變あるが。則妖魅の託く所あり。此歌も正しき神の事小  
を非。鬼魅の類ひを云へるなり。其を千早振と有る乃て

も知べし。此を人の解得が。其事ある故小。少り注し扱。斯  
有れ也。然る木ども有るむ。速に伐棄べき事小る也。

其時小光。右大臣也云。人有り。深草の天皇此御子あり。身や賢  
く。智明ある人。乃て。此佛の現じ。事。頗る心得。思給ひ。  
實の佛也。木末より出給ふ。法き様あり。此を天狗などの所為  
を。有るめ。外術を七日。過。今日我。行て見む。を出立給ふ。  
外術とは。外道の術といふ事。乃て。佛法より。外此術をいぬ  
語あり。大論小委しく見え。乃り。

装束直く。ちて。櫛擗毛の車に乗て。前駈おど直しく具して。其  
處小行給ひ。若干詣集る人を拂ひ去させ。車を搔下し。榻を



立<sup>タテ</sup>車の簾<sup>スチ</sup>を卷<sup>マキ</sup>上<sup>ア</sup>りて見給へむ。實<sup>ミコト</sup>小木末<sup>コノヘ</sup>に佛在り。金色の光を放<sup>ハク</sup>ちて。空<sup>カラ</sup>より様<sup>サマ</sup>々の花を降<sup>フ</sup>りて。雨の如し。見<sup>ミ</sup>小實<sup>コノヘ</sup>に貴きと限<sup>カギ</sup>なし。而<sup>シカ</sup>る小大臣<sup>コノヘ</sup>にこむる。恠<sup>アヤ</sup>しく覺<sup>シ</sup>え給ひりれむ。佛<sup>ハツ</sup>小向<sup>コノヘ</sup>ひて目<sup>メ</sup>成<sup>ナリ</sup>も瞬<sup>タタ</sup>らばあて。一時<sup>トキ</sup>をうり守<sup>マモ</sup>り給<sup>タマ</sup>へば。此佛<sup>ハツ</sup>暫<sup>シバ</sup>くあそ光を放<sup>ハク</sup>ち。花<sup>ハナ</sup>を降<sup>フ</sup>りしあどりりき。強<sup>ツヨク</sup>に守<sup>マモ</sup>る時<sup>トキ</sup>小。倅<sup>シ</sup>て忽<sup>タダ</sup>に大<sup>オホ</sup>ある屎<sup>クソ</sup>鷄<sup>トビ</sup>の翼<sup>ツバ</sup>折<sup>ヤ</sup>る小成<sup>コノヘ</sup>て。木<sup>キ</sup>上<sup>ノ</sup>より土<sup>ツチ</sup>に落<sup>オチ</sup>てふ。めくを多く此人<sup>コノヒト</sup>此<sup>コノ</sup>を見て。奇<sup>オモ</sup>異<sup>イ</sup>ありと思<sup>オモ</sup>ひ。小童<sup>コノヘ</sup>部<sup>ブ</sup>とも寄<sup>ヨ</sup>りて。彼<sup>カノ</sup>屎<sup>クソ</sup>鷄<sup>トビ</sup>を打<sup>ウ</sup>殺<sup>コロ</sup>してけり。

和名抄<sup>ワナヒ</sup>子<sup>コ</sup>。本草<sup>ホク</sup>云<sup>ク</sup>。鳩<sup>トビ</sup>一名<sup>ナヒ</sup>鷲<sup>トビ</sup>。和名<sup>ワナヒ</sup>土<sup>ツチ</sup>比<sup>ヒ</sup>。爾雅<sup>ニ</sup>注<sup>チ</sup>云<sup>ク</sup>。鷲<sup>トビ</sup>一名<sup>ナヒ</sup>鷲<sup>トビ</sup>。鷲<sup>トビ</sup>食<sup>ク</sup>鼠<sup>ネズミ</sup>而<sup>シテ</sup>大<sup>オホ</sup>目<sup>メ</sup>者<sup>ナリ</sup>也<sup>ナリ</sup>。漢語抄<sup>カンゴ</sup>云<sup>ク</sup>。久<sup>ク</sup>曾<sup>ソウ</sup>止<sup>ト</sup>比<sup>ヒ</sup>とあり。寺嶋良安<sup>テラシマ</sup>云<sup>ク</sup>。

鷲<sup>トビ</sup>狀<sup>シテ</sup>似<sup>シ</sup>鷲<sup>トビ</sup>而<sup>シテ</sup>羽<sup>ウ</sup>毛<sup>モ</sup>疎<sup>ス</sup>。飛<sup>トビ</sup>翔<sup>キョウ</sup>不能<sup>キ</sup>。鷲<sup>トビ</sup>鳥<sup>ト</sup>但<sup>シテ</sup>攫<sup>ツク</sup>牛<sup>ウシ</sup>馬<sup>ウマ</sup>枯<sup>カ</sup>糞<sup>フン</sup>或<sup>ハ</sup>魚<sup>イサ</sup>物<sup>モノ</sup>鳥<sup>ト</sup>雛<sup>チナ</sup>食<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>と云<sup>フ</sup>へり。此<sup>コノ</sup>字<sup>ジ</sup>馬<sup>ウマ</sup>屎<sup>クソ</sup>鷲<sup>トビ</sup>とも云<sup>フ</sup>ふ。常<sup>トキ</sup>の鷲<sup>トビ</sup>よりトビ稍<sup>シヤウ</sup>大<sup>ダイ</sup>小<sup>コ</sup>。羽<sup>ウ</sup>毛<sup>モ</sup>疎<sup>ス</sup>びて。汚<sup>キタナ</sup>く憎<sup>ニク</sup>さげ様<sup>サマ</sup>し。古<sup>コ</sup>鷲<sup>トビ</sup>をいふ。然<sup>サ</sup>れど常<sup>トキ</sup>の鷲<sup>トビ</sup>と處<sup>トコロ</sup>を異<sup>コト</sup>なす。非<sup>ヒ</sup>交<sup>カウ</sup>共<sup>トモ</sup>小<sup>コ</sup>交<sup>カウ</sup>て有<sup>ア</sup>る中<sup>ナカ</sup>。稍<sup>シヤウ</sup>形<sup>ケイ</sup>の異<sup>コト</sup>ある。此<sup>コノ</sup>字<sup>ジ</sup>あり。合<sup>カ</sup>類<sup>レイ</sup>節<sup>セツ</sup>用<sup>ヨウ</sup>小<sup>コ</sup>。鷲<sup>トビ</sup>字<sup>ジ</sup>まじ。鷲<sup>トビ</sup>字<sup>ジ</sup>れどを。クソトビと訓<sup>クニ</sup>み。戴<sup>タイ</sup>勝<sup>ショウ</sup>を。マクソツカミヤモ。クソトビ也<sup>ナリ</sup>も有<sup>ア</sup>り。偕<sup>イ</sup>はる。馬<sup>ウマ</sup>屎<sup>クソ</sup>鷲<sup>トビ</sup>といふ物<sup>モノ</sup>あり。此<sup>コノ</sup>を屎<sup>クソ</sup>あそ攫<sup>ツク</sup>め。鷲<sup>トビ</sup>の類<sup>レイ</sup>ふて。鷲<sup>トビ</sup>とを異<sup>コト</sup>あり。寺嶋<sup>テラシマ</sup>氏<sup>シ</sup>云<sup>ク</sup>。鷲<sup>トビ</sup>と。同<sup>ドウ</sup>じ物<sup>モノ</sup>小<sup>コ</sup>記<sup>キ</sup>せるは誤<sup>ア</sup>り。大臣<sup>テイジン</sup>は然<sup>シカ</sup>れむ。こゝ。實<sup>ミコト</sup>の佛<sup>ハツ</sup>は。何<sup>ナニ</sup>故<sup>ユ</sup>小<sup>コ</sup>。俄<sup>トキ</sup>に木<sup>キ</sup>末<sup>ノヘ</sup>小<sup>コ</sup>を現<sup>ア</sup>じ給<sup>タマ</sup>ふ。ほき。人の此<sup>コノ</sup>を悟<sup>サト</sup>らばして。日<sup>ヒ</sup>來<sup>キ</sup>禮<sup>レイ</sup>み。惶<sup>オドロク</sup>る。愚<sup>オロカ</sup>ありと云<sup>フ</sup>ひ。



て返<sup>カ</sup>て給<sup>ヒ</sup>ふり<sup>コ</sup>。然れ<sup>カ</sup>も其<sup>ニ</sup>庭<sup>ノ</sup>の若<sup>ソ</sup>干<sup>コ</sup>此人<sup>ノ</sup>ども。大臣<sup>ヲ</sup>を<sup>カ</sup>む<sup>ク</sup>讚<sup>ム</sup>  
申<sup>ル</sup>る。世<sup>ノ</sup>人も此<sup>ノ</sup>を聞<sup>キ</sup>て。大臣<sup>ハ</sup>は賢<sup>ク</sup>う<sup>コ</sup>り<sup>ル</sup>人<sup>哉</sup>と。讚<sup>ム</sup>申<sup>ル</sup>る  
と見え。

身<sup>ミ</sup>才<sup>サ</sup>實<sup>ジ</sup>小<sup>コ</sup>賢<sup>ク</sup>き大臣<sup>ノ</sup>の御<sup>オ</sup>り<sup>ル</sup>。然れ<sup>カ</sup>も彼<sup>ノ</sup>を。實<sup>ノ</sup>の佛<sup>ト</sup>をい<sup>ハ</sup>せ  
貴<sup>ク</sup>て。木<sup>ノ</sup>末<sup>ノ</sup>あ<sup>ト</sup>う出<sup>ダ</sup>き物<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>非<sup>ヒ</sup>也<sup>ト</sup>。思<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>は<sup>シ</sup>由<sup>リ</sup>ある  
は。實<sup>ノ</sup>の佛<sup>モ</sup>も眞<sup>ト</sup>小<sup>コ</sup>を。屎<sup>ク</sup>鷄<sup>ト</sup>の大き<sup>ク</sup>。殊<sup>ニ</sup>幻<sup>ノ</sup>通<sup>ヲ</sup>を得<sup>ル</sup>る物<sup>ト</sup>  
を思<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>は<sup>シ</sup>。甚<sup>ニ</sup>惜<sup>ム</sup>き事<sup>ナ</sup>り。此事<sup>ハ</sup>は宇<sup>ツ</sup>治<sup>シ</sup>拾<sup>シ</sup>遺<sup>シ</sup>物<sup>ノ</sup>語<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>  
も見<sup>エ</sup>え<sup>ル</sup>ま<sup>は</sup>ば。合<sup>セ</sup>て見<sup>テ</sup>て舉<sup>ゲ</sup>る<sup>コト</sup>。

は<sup>シ</sup>十<sup>ノ</sup>訓<sup>抄</sup>小<sup>コ</sup>。後<sup>ニ</sup>冷<sup>泉</sup>院<sup>ノ</sup>の御<sup>時</sup>。天<sup>ノ</sup>狗<sup>ア</sup>ま<sup>シ</sup>て。世<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>騷<sup>ガ</sup>し<sup>有</sup>け  
る頃<sup>ニ</sup>。西<sup>ノ</sup>塔<sup>ニ</sup>住<sup>ル</sup>る僧<sup>ノ</sup>。白<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>京<sup>ヲ</sup>出<sup>テ</sup>て歸<sup>ル</sup>る<sup>コト</sup>。東<sup>ノ</sup>北<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>の北

此<sup>レ</sup>大<sup>ノ</sup>路<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>童<sup>部</sup>五<sup>六</sup>人<sup>バ</sup>う<sup>集</sup>り<sup>テ</sup>。物<sup>ヲ</sup>を打<sup>ツ</sup>領<sup>シ</sup>り<sup>ル</sup>を<sup>歩</sup>み  
寄<sup>リ</sup>て見<sup>レ</sup>れ<sup>カ</sup>。古<sup>ノ</sup>鳶<sup>ノ</sup>の世<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>怖<sup>シ</sup>氣<sup>ア</sup>る<sup>哉</sup>。縛<sup>テ</sup>搦<sup>メ</sup>て<sup>搦</sup>めて打<sup>ツ</sup>  
り<sup>コト</sup>。何<sup>カ</sup>忌<sup>ミ</sup>じ<sup>レ</sup>れ<sup>カ</sup>。如此<sup>ニ</sup>なる<sup>コト</sup>と云<sup>ハ</sup>ば。殺<sup>シ</sup>て羽<sup>ヲ</sup>を取<sup>ラ</sup>む  
と云<sup>フ</sup>。此<sup>ノ</sup>僧<sup>ノ</sup>慈悲<sup>ヲ</sup>を發<sup>シ</sup>て。扇<sup>ヲ</sup>を取<sup>セ</sup>て。此<sup>ヲ</sup>を乞<sup>ヒ</sup>取<sup>テ</sup>て放<sup>チ</sup>遣<sup>ル</sup>。  
世<sup>ノ</sup>の諺<sup>ト</sup>小<sup>コ</sup>太<sup>郎</sup>坊<sup>モ</sup>鳶<sup>ト</sup>と成<sup>テ</sup>ては。鳶<sup>ノ</sup>の智<sup>慧</sup>あら<sup>う</sup>で<sup>れ</sup>し。  
や云<sup>フ</sup>事<sup>ヲ</sup>思<sup>ヒ</sup>合<sup>サ</sup>る。は<sup>シ</sup>上<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>云<sup>フ</sup>。万<sup>能</sup>池<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>龍<sup>ノ</sup>の事<sup>ヲ</sup>も  
思<sup>フ</sup>べ<sup>シ</sup>。此<sup>ノ</sup>鷄<sup>ヲ</sup>を大<sup>ニ</sup>じ<sup>レ</sup>て天<sup>ノ</sup>狗<sup>アリ</sup>し<sup>コト</sup>も。鳶<sup>ト</sup>と化<sup>シ</sup>て捕<sup>ム</sup>  
ら<sup>せ</sup>し<sup>ら</sup>ば。う<sup>く</sup>怯<sup>ク</sup>う<sup>コト</sup>なり。ま<sup>は</sup>此<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>。里<sup>ノ</sup>人<sup>談</sup>小<sup>コ</sup>本<sup>朝</sup>語  
園<sup>ヲ</sup>を引<sup>テ</sup>て。永<sup>承</sup>の頃<sup>ニ</sup>と有<sup>リ</sup>。

忌<sup>ミ</sup>志<sup>キ</sup>功<sup>徳</sup>造<sup>ル</sup>れ<sup>カ</sup>。思<sup>ヒ</sup>て行<sup>ク</sup>べ<sup>シ</sup>。切<sup>テ</sup>堤<sup>ノ</sup>の布<sup>ヲ</sup>を<sup>敷</sup>く<sup>コト</sup>。



已異<sup>コトサマ</sup>様ある法師の歩<sup>アユ</sup>み出て。後<sup>カク</sup>れじと歩<sup>ヨリ</sup>み寄<sup>ヨリ</sup>りれむ。氣色<sup>ケシキ</sup>覺<sup>ホ</sup>  
えて。傍<sup>カタク</sup>小立よ<sup>ア</sup>りて。過<sup>スグ</sup>さむと為<sup>レ</sup>りる。小彼法師<sup>チカ</sup>近<sup>チカ</sup>よりて云<sup>ッ</sup>や  
う。御憐<sup>アハレ</sup>みを蒙<sup>カクム</sup>りて。命<sup>イナヒ</sup>生<sup>イキ</sup>て侍<sup>イ</sup>れむ。其悅聞<sup>イキ</sup>えむとてれど云<sup>ッ</sup>ふ  
僧立<sup>ソウ</sup>歸<sup>キ</sup>りて得<sup>ク</sup>こそ覺<sup>サト</sup>え祢<sup>タシ</sup>。誰<sup>タレ</sup>人<sup>ヒト</sup>ふくと問<sup>ト</sup>りれむ。然<sup>サ</sup>ぞ思<sup>シ</sup>ひら  
む。東北院の北<sup>キタ</sup>大路<sup>ダイロ</sup>小<sup>コ</sup>て辛<sup>カラ</sup>死<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>見<sup>ミ</sup>て侍<sup>イ</sup>扱<sup>サツ</sup>る。老法師<sup>ロウ</sup>小<sup>コ</sup>侍<sup>イ</sup>り。  
生<sup>イ</sup>者<sup>シヤ</sup>を命<sup>イナヒ</sup>小<sup>コ</sup>過<sup>スギ</sup>く物<sup>モノ</sup>あし。斯<sup>カ</sup>ばう<sup>ウ</sup>已<sup>イ</sup>の御志<sup>ミシ</sup>小<sup>コ</sup>は。争<sup>イカ</sup>でう報<sup>ホウ</sup>じ  
申<sup>マウ</sup>らむ。何事<sup>ナニコト</sup>小<sup>コ</sup>ても念<sup>ネン</sup>比<sup>ヒ</sup>ある御願<sup>ミガン</sup>あらむ。一<sup>ヒト</sup>事<sup>コト</sup>叶<sup>カナ</sup>ふ奉<sup>ホウ</sup>ら  
む。已<sup>イ</sup>たり扱<sup>サツ</sup>知らせ給<sup>タマ</sup>らむ。小神通<sup>コトウ</sup>を得<sup>トク</sup>れば。何<sup>ナニ</sup>うを叶<sup>カナ</sup>へざ  
らむと云<sup>フ</sup>ふ。淺猿<sup>アサマシ</sup>く珍<sup>メウ</sup>ある態<sup>イハ</sup>うあ<sup>ハ</sup>と。六<sup>ム</sup>うしく思<sup>シ</sup>ひあ<sup>ハ</sup>ら。細<sup>コメ</sup>や  
う小<sup>コ</sup>云<sup>フ</sup>ふ。様<sup>サマ</sup>あそ有<sup>ア</sup>ら免<sup>マフ</sup>と思<sup>シ</sup>ひて。我<sup>ワレ</sup>も此<sup>コノ</sup>世<sup>ヨ</sup>の望<sup>ノゾミ</sup>更<sup>ニ</sup>小<sup>コ</sup>形<sup>カタ</sup>し

年七十小成<sup>コト</sup>れ已<sup>イ</sup>。然<sup>シカ</sup>まは名聞<sup>ナモン</sup>利養<sup>リヤウ</sup>ハ味氣<sup>アヰキ</sup>れし。後世<sup>コノ</sup>こそ恐<sup>オソ</sup>し  
りまども。其<sup>ソノ</sup>をい<sup>ハ</sup>うで。の叶<sup>カナ</sup>ふ<sup>ハ</sup>きあまは。申<sup>マウ</sup>小<sup>コ</sup>及<sup>キ</sup>む。但<sup>タ</sup>  
し釋迦<sup>シヤカ</sup>如來<sup>ニョライ</sup>の靈山<sup>レイサン</sup>小<sup>コ</sup>て。説法<sup>セツポフ</sup>し給<sup>タマ</sup>ひらむ。粧<sup>シヨホ</sup>ひあ<sup>ハ</sup>そ。感<sup>カン</sup>か<sup>ハ</sup>り  
免<sup>マフ</sup>と思<sup>シ</sup>ひ遣<sup>ヤ</sup>られて。朝夕<sup>チャウシヤウ</sup>心<sup>シン</sup>う懸<sup>カ</sup>りて。見<sup>ミ</sup>ま欲<sup>ホシ</sup>く覺<sup>サト</sup>えれむ。其<sup>ソノ</sup>有<sup>ア</sup>  
狀<sup>サマ</sup>をあ<sup>ハ</sup>ひて。見<sup>ミ</sup>せ給<sup>タマ</sup>あむやと云<sup>フ</sup>へば。最<sup>イト</sup>易<sup>ヤス</sup>き事<sup>コト</sup>あり。然<sup>サ</sup>様<sup>ヤマ</sup>の  
物<sup>モノ</sup>效<sup>キウ</sup>するを。己<sup>ミ</sup>が德<sup>トク</sup>と為<sup>ス</sup>る。勿<sup>ナ</sup>りや云<sup>フ</sup>ひて。下<sup>サガ</sup>り松<sup>マツ</sup>の上<sup>ノ</sup>北<sup>キタ</sup>山<sup>サン</sup>予<sup>ヨ</sup>  
具<sup>ク</sup>して上<sup>ノ</sup>りぬ。志<sup>シ</sup>はし目<sup>メ</sup>扱<sup>サツ</sup>ふさたて居<sup>イ</sup>給<sup>タマ</sup>へ佛<sup>ブツ</sup>に説法<sup>セツポフ</sup>の御聲<sup>ミコエ</sup>  
聞<sup>ク</sup>えむ時<sup>トキ</sup>小<sup>コ</sup>。目<sup>メ</sup>扱<sup>サツ</sup>む開<sup>アキ</sup>給<sup>タマ</sup>ふ。但<sup>タ</sup>し何<sup>ナニ</sup>れ畏<sup>カシ</sup>て貴<sup>タカ</sup>しと思<sup>シ</sup>ひ。信<sup>シン</sup>を  
だ小<sup>コ</sup>發<sup>ハツ</sup>し給<sup>タマ</sup>はむ。己<sup>ミ</sup>がふ<sup>ハ</sup>め惡<sup>アク</sup>からむと云<sup>フ</sup>ひて。山<sup>ヤマ</sup>の峰<sup>ミネ</sup>北<sup>キタ</sup>方<sup>カタ</sup>予<sup>ヨ</sup>  
上<sup>ノ</sup>りぬ。



天狗此此言をよく思ひて。世に佛并の靈驗。まゝ天上極樂  
地獄など云ふ處ども哉。人小見まゐるれど。釋魔の變現ある  
事を辨ふべし。まゝかく云ひて上れ依を。靈山說法此狀を  
止る時の志布小せむやて。其由下文を見て知べし。  
とばうして。說法の御聲聞えりまは。目見開する小。山を  
靈山せり。池を紺瑠璃とあり。木を七重寶樹と成て。釋迦如  
來獅子の牀に上小おはし坐し。普賢文殊左右座し。菩薩  
薩聖衆雲霞の如し。帝釋四天王龍神八部。所も亦く充滿あり。  
空よ四種花降りて。香し風吹き。天人雲小列ありて。微  
妙の音樂を奏じ。如來寶花小座して。甚深の法門を演説し。其

事がら。大く心も言葉も及がし。暫こそ甚しく學び似せ  
しりふと。興有て思えり。様の瑞相。見る小在世に。說法の  
砌小望めるが如し。信心忽小起りて。隨喜の涙眼小浮ひ。渴仰  
の思ひ骨小徹る間手を額にありて。歸命頂禮する程。山影  
しくはらえき。騒ぎて有ける大會かき消却如く小失せぬ。夢  
れ覺るが如し。まは如何小志ける事ぞと。忙し騒ぎて見廻せ  
む。まゝと有ける山中草深あり。淺猿あがり。然て有るきあら孫  
は山戸上依り。水のみれ程ありて有ける法師出來て。然むら  
契する事を違へ給ひて。信を發し給へる小依て。護法天童降  
り給ひて。何とて斯ばう。其の信者をは。誑り以て。我等を



責<sup>サイ</sup>給<sup>ト</sup>へる間雇<sup>ヤト</sup>ひ集<sup>ツ</sup>る法師原もくらき肝潰<sup>キモツク</sup>して逃去<sup>ニゲ</sup>せぬ已<sup>ナ</sup>が片<sup>ハ</sup>くの羽<sup>ハ</sup>がひ打<sup>ヒ</sup>きて術<sup>マギ</sup>あしとて失<sup>ウシ</sup>ふりりと見<sup>ミ</sup>ゆ。  
わく宜<sup>ヨク</sup>くしげ<sup>シ</sup>の護法天童降<sup>ク</sup>て云<sup>イハ</sup>くと云<sup>イハ</sup>ずるを變現<sup>ハル</sup>し  
する靈山<sup>リョウサン</sup>此<sup>コノ</sup>状<sup>サマ</sup>を止<sup>ト</sup>ま<sup>ス</sup>依<sup>ヨ</sup>ち布<sup>フ</sup>云<sup>イハ</sup>へ依<sup>ヨ</sup>幻語<sup>マギコト</sup>あり。然<sup>シカ</sup>るは護  
法天童<sup>ホフテン</sup>とて佛法<sup>ブツポフ</sup>を護<sup>ゴ</sup>依<sup>ヨ</sup>物の天上<sup>テンノウ</sup>に在<sup>ア</sup>るいふを佛法<sup>ブツポフ</sup>の幻  
説<sup>セツ</sup>小<sup>コ</sup>こそ有<sup>アル</sup>れ實<sup>マコト</sup>なる物<sup>モノ</sup>に有<sup>アル</sup>る非<sup>ヒ</sup>ざれをあり。偕<sup>サテ</sup>これ  
事は本朝語<sup>ホンテウゴ</sup>園<sup>エン</sup>にも見<sup>ミ</sup>えあるが。共<sup>トモ</sup>る本<sup>ホン</sup>は今昔物語<sup>イマコノモノリ</sup>集<sup>ツ</sup>り記  
せるを採<sup>ツク</sup>れ<sup>ル</sup>と思<sup>オモ</sup>え依<sup>ヨ</sup>。但<sup>シ</sup>今傳<sup>イマツタ</sup>る今昔物語<sup>イマコノモノリ</sup>ふを比<sup>ヒ</sup>叡<sup>エ</sup>  
山<sup>ヤマ</sup>天狗<sup>テンコ</sup>報<sup>ホウ</sup>助<sup>シュ</sup>僧<sup>ソウ</sup>恩<sup>オン</sup>語<sup>ゴ</sup>といふ題<sup>チ</sup>のみ有<sup>アル</sup>て。文<sup>カキ</sup>を闕<sup>ケツ</sup>り。必<sup>カナラ</sup>此  
を採<sup>ツク</sup>る依<sup>ヨ</sup>べし。是<sup>コト</sup>ら正<sup>マサ</sup>しく形<sup>カタチ</sup>を古屎<sup>フルシ</sup>鷄<sup>トビ</sup>に受<sup>ウケ</sup>て。幻通<sup>マギトウ</sup>の

る天狗<sup>テンコ</sup>あり。

抑<sup>ソメ</sup>釋<sup>シヤク</sup>魔<sup>マ</sup>の鷲<sup>シユ</sup>ま<sup>と</sup>鷄<sup>トビ</sup>の形<sup>カタチ</sup>を受<sup>ウケ</sup>る事は。上<sup>ウヘ</sup>に論<sup>ロン</sup>へる如<sup>トシ</sup>く。天狗<sup>テンコ</sup>と  
いふ物<sup>モノ</sup>を。元<sup>キタ</sup>より狗<sup>イヌ</sup>にも狸<sup>ヌル</sup>にも似<sup>ニ</sup>たるが。高鼻<sup>タカハナ</sup>長喙<sup>ナガクビ</sup>みて翼<sup>ハネ</sup>あ  
る。此<sup>コノ</sup>をも種<sup>タネ</sup>の鳥獸<sup>トリノケモノ</sup>も化<sup>カ</sup>れど。鷲<sup>シユ</sup>の化<sup>カ</sup>依<sup>ヨ</sup>が多<sup>オホク</sup>るを。山  
人<sup>サンジン</sup>説<sup>セツ</sup>あまば。其<sup>ソノ</sup>部<sup>ブ</sup>に入<sup>イ</sup>る故<sup>ユヘ</sup>。此<sup>コノ</sup>形<sup>カタチ</sup>を受<sup>ウケ</sup>る形<sup>カタチ</sup>を。見<sup>ミ</sup>し。

但<sup>シ</sup>そを皆<sup>みな</sup>がら。一<sup>ヒト</sup>様の形<sup>カタチ</sup>とは聞<sup>キ</sup>えぬ。人體<sup>ニニ</sup>のま<sup>と</sup>高鼻<sup>タカハナ</sup>  
なるも有<sup>アル</sup>る。ま<sup>と</sup>翼<sup>ハネ</sup>に有<sup>アル</sup>るも無<sup>ナシ</sup>きも。交<sup>マ</sup>依<sup>ヨ</sup>と見<sup>ミ</sup>えたり。諸  
國<sup>クニ</sup>里<sup>リ</sup>人<sup>ジン</sup>談<sup>ダン</sup>といふ書<sup>シヤク</sup>。駿河<sup>スチノエ</sup>遠江<sup>トウヅ</sup>の境<sup>サカイ</sup>ある大井<sup>オホイ</sup>川<sup>カハ</sup>みて天狗<sup>テンコ</sup>  
を見<sup>ミ</sup>えたり。聞<sup>キ</sup>ゆる夜<sup>ヨ</sup>の深<sup>フカ</sup>更<sup>ミ</sup>に及<sup>およ</sup>びて。潛<sup>ヒソカ</sup>に封壇<sup>トウダン</sup>堤<sup>ツツミ</sup>の陰<sup>カゲ</sup>  
小忍<sup>コニン</sup>びて伺<sup>ウカ</sup>ふ。鷲<sup>シユ</sup>の如<sup>トシ</sup>くある。翅<sup>ハネ</sup>の徑<sup>ワタリ</sup>六尺<sup>ロクシヤク</sup>たり。正<sup>マサ</sup>なる



大鳥の様ある物川カハツラ面小あまゝ飛來上ウヘ下シタまで魚をと  
る様あり。人音コトを忽ト去る。是を俗小いふ術コノハあき。木葉  
天狗れどいふ類ルやと見也。遠江國人中村真幸云ハひる  
は正マサしく其形を見よる事は無れど。秋葉アキハを此外高き山々  
る。夜ヨル天狗の火とて數多見アヤクゆる事あり。其火の狀サマ留りて  
在るうと見れむ。遙ハルカ小飛去トビサリると見み見えミえミみ。樹間コノマに出没イデイリ  
を依事ヨシあり。又時ヨリとして。彼物の噂ウサれど何ナニしカはハ小云コトとた  
は其火忽トり目メ近チカく來りて。煌キラく事有り。大うと件ケンの火れ見  
ゆるを。夏の事あるが電イナヅマし雷カミナリの音聞ミゆれむ。有アる火ども  
次ツギく小去サリケ失シぬ。其コノちま雷カミナリれ聞ミえぬ方カタ所トコロ逃ニゲ行くやうニふて。終マタ

小見えをコトあハめぬ。是を常の事あれむ。必カナラ其形を見る人有アべ  
しと云り。又疫病エヤミモカサ痘瘡ウツ神カミと。都スベて妖魅マガモノれ類ルの雷カミナリを怖オソる  
事思オモひ合アひさヒ依ヨ。

然シカれども然サる忌イミじき形を受ウるは。大天狗小天狗あといふ強  
猛ヒコな依ヨ釋シヤク魔マあるが。高タカくも卑ヒクくも尋常ヨソナリの無智ムチゆる僧ソウを。屎シヤク鷄キ  
ともト形カタく。凡ツギの鷄キと成ナせ見ミえスとス。

其コノを法師は。摠カサじて人の門カド小立コタて。物モノ乞コトふ倫マまでも。自然オノツカ小  
貢コノ高タカ邪慢ジャマンれ心ココロ淡ツカく。吾オレこそ最無上サイムジョウの尊ウツクシき道ミチを行ユふ。聖ホウよと  
思オモひ顔ガホふて。俗家を凡夫ボウフと陋イハしむる心ココロを。ほゞくクくク有アりて。  
有智無智を云はス。俗家の物を掠カスめ取トルらむと欲ホシする心ココロ。常



よ見ゆるを。驚まゝ、鳶はも。竊を伺ひ。人の手小持する物を  
爪去らむと欲するが。其性の似たる故。互に生  
變ふるゆや有らむ。但し此を試小云々みそ。因に云ふ。先年  
我許小使へし。男の。遠江國人あるが云らるは。吾郷の邊  
に。天狗の漁獵と云ひて。池まゝ堀れどの魚。大き小さ。蛇悉  
小死て何る事有。然る小其魚。目一筋もなし。此を皆彼物  
の取食へ依ありと云へり。天狗をける業もける事小や。俗  
諺。悪かしく。人の見ぬま小物に依を。眼をぬくと云事  
何。此天狗此所為より云ひ出さる。

然るは沙石集小。和州菩提山の本願僧正。此房子。忠寛正信房

と云僧有。餘小眠りまむ。眠正信房とぞ云らると。是  
が甚しく眠れる事どもを記し。諸其死るる後の事を記して。  
近ぶる興福寺の東門院小有。兒隱所小居よりける小。春  
日山の方より。鷄一羽來りて。此兒の前小眠居り。怖しき  
小。腰刀を抜てはと切て。やがて絶入し。あま依を。人見  
らて。房へうた入きて祈り。刀小血付き鷄の毛散とり。正  
らて口走りて。忠寛が何とれく眠居るを。過し依事易ら  
ぶとぞ云らる。とかく祈あしらへて。別事無。先生小眠  
正しが。生を隔ても眠るふこそ。習因習果といふ事あり。  
辨子知べし。常小心。思そみ。身小馴ぬる事を。生を經れども



相次て忘れず捨難くして自然小為られ思慮也と有り。

習因習果の説實小然る言あり。心有らむ人をよく此理を

思ひて常此因を神の道に習ひて神の道に果を得む事哉

思ふはし。

ほく舊き諺小も。鷄を天狗の乗物といひ。山伏の果を鷄小成

とも云ふれを。無智に尼法師山伏をせは。大凡鷄と成りて。天

狗に下使を為て。人間小神に守りき透間を伺ひ。妖魔の入る

手引を成る物と見えたり。

鷄を天狗の乗物と云。諺を。源平盛衰記に。治承元年四月廿

八日の大火に處小。指巫と名を得たる盲卜者なり。火本ハ槌

口富小路と云。城聞て。占は推條口占とて。火口と云。牙は燃

廣からむ。富小路と云へを。鷄は天狗の乗物あり。小路を歩

む道あり。天狗を愛宕山に住めば。天狗に所為りて。巽の槌

口よ。乾の愛宕を指て筋違さま小焼りぬと覺也。と云へ

依由見えて。果して其言の如く焼りぬ。今世も。尻尾に切

る鷹の飛ぶちと有る邊を。ともいふを。火災ありと云ひ。

鷄を太郎坊に使者をせと云。山伏の果を鷄小あると云

ふとは。猿樂の梯山伏といふ狂言に言葉小見えたり。共小

舊く然る諺に有し小依りて云へる形也。ま。梅窓筆記に。

焼亡に太郎次郎と云。清禪眼抄。後清録記云。治承二年



戊戌四月廿四日夜半許。七條北東洞院東中許。洞院面焼亡。世人號次郎焼亡也。太郎去年四月廿八日。至于大極殿焼亡。云くと有るも。由有ける事なり。まゝ近き世に記せる書あれ也。新著聞集に。京の釜座下立賣下町に。丹後屋佐兵衛と云ふ絹屋有しが。機を二十四立り。或時機の鳥居に。鴟をほり居眠り。其翌朝よ。一機の糸何とある切り。誰がわざと穿議しりれども。更に證據も無く。此の如く毎日切る程に。後には二十四機残らば切しうは。祈禱をど修まらふ。卵を切せり。或人云く。今度の次第を思ふに。憍慢の心あり。斯る災の何ゆや。最初小嶋に來ても。只

事小非也。愛宕信仰然る。傍しと云ふは。實尤の事とて。正五九月に。愛宕山に百味を献り。月詣まべきよし。立願せしうは。災忽り止り。と云事あり。まゝ下總國香取郡万歳村ある門人。高橋正雄が語りらく。近き程我が村に後山へ。村の者ども五人連立て。木こて不行り。少し傍ある山の端に。常のよめを汚氣小見ゆる。鷄一羽。羽を休め居あり。其を見て中ある一人が。恐ろしげある山伏に立居と依と云ふ。然るに四人の者に。目小は。鷄とのみ見われむ。云ひ諍ふ。彼一人に。正しく山伏なる者をと云ひて。更に四人が言を聞入をば。共小山よて歸りて。後小彼男忽ち熱さし煩



以て死ふるが。残り四人を何事も無さま。甚異し此事あり  
と語りき。猶山伏せ見え。鸛と見えとゆと云ふこと。外も  
聞さる事ゆれど。煩々を悉くを記さる。

於此ホカ餘ホカも。釋魔と成べき因縁の語等也。經論も多く見  
るを。彼此記さば。ま於楞嚴經。佛告阿難。攝心爲戒。因戒生定。  
因定發慧。是名三無漏學。淫心不除。則塵不可出。縱有多智禪定  
現前。如不斷淫。必落魔道。と有るは。淫心を斷ざる僧徒の。魔道  
小墮る證文あり。此も依りて。熟く古の名僧大徳と聞えし。釋  
子等の。姪事小心を蕩し。倫を按ゆる。ま於舊く釋玄昉  
は僧正として。光明皇后を犯して。善珠僧正成生せ奉り。

光明皇后も。藤原不比等の女ありて。聖武天皇の后なり。玄  
昉も其頃の智識ありて。唐土より渡り。種々此經論法をも傳來  
り。朝廷は更あり。世も重く用られあるを。皇后深く愛し給  
ひ。玄昉が子を生給へり。善珠僧正是あり。此もて國史も。  
僧正善珠も。光明子也。孽子ありと記されたり。然れど。天皇  
は知看さば。一人も此事を云ひ露る者無ゆし。中も藤原  
廣繼といひし人ありて。天皇も玄昉が奸を奏しける。却り  
て廣繼を逆鱗有て。筑紫を流し給ひし。は廣繼憤りて。謀  
反し起しぬ。爰も追討使を遣して。誅志給ふ。其後玄昉を筑  
紫の觀音寺に遣し給ふる。廣繼の靈魂雷とれりて。玄昉



が首を抜捨スキステりりた。委カクくも國史を見べし。斯カクて玄昉が靈の  
魔道小入アデる事也。太平記ある雲景が未來記を見て知べ  
し。其も下小舉アデりて。

釋道鏡也。如意輪法アデ字行アデする驗小よアアデて。高野姫、天皇アデ寵せ  
らま奉アデり。

古事談小。此女帝也。天平寶字六年アデ。簪カクを落カクし佛道小入アデり。  
法諱イリノミを法基尼と稱し奉る。同七年の九月アデ。道鏡法師を小  
僧都とれし給ふ。元モトも河内國人也。俗姓を弓削氏也。法  
相宗也。西大寺義淵僧正此門流也。常小禁掖イタり侍アデり甚  
く寵愛せらる。如意輪法の驗徳と云へり。天皇道鏡が陰を。

糸イテ不足アデり思食イテされ。薯蕷アデをもて陰形を作アデり。用アデさせ給ふ  
小。折籠アデりて腫塞アデり。大事小及ぶとた。百濟國の醫師小。小手  
尼とて。其手アデ嬰子アデの手也。如くれるが。見奉りて。帝疾癒イユべし  
也。手小油を塗アデりて。取らむと欲アデり依アデり。右中辨百川。靈狐  
ぬゆと云ひて。劔アデを抜アデりて尼の肩カクを切アデり。此小仍アデりて療アデり事  
あく。崩アデじ給ふと有アデり。糸イテ道鏡が惡逆也。國史を見て知アデべ  
し。畏カレコくも天日嗣アデをさへり窺ウカひ奉アデり。堪囊抄アデり。天皇密ヒカ小  
藤原押勝を幸アデし給ひ。まアデ道鏡を召アデりて。寵遇他アデり異あり。此  
二人幸人として。威勢アデ争アデりる故也。涅槃經小。所アデ有アデ三千界  
男子諸煩惱。合集アデ為アデ一人。女人之業障アデといふ文を獻覽有アデり。



朕女人ありと云ふども。全く此儀ありし。佛の妄語ありとて。經ノ小便を為シ給へり。此經の護法神怒リるハや。忽ニ姪慾熾盛ニ成リ御座のみあらば。女根廣博ニして。敢テ其欲を停ムがトく。天下小勅を下シて。大根の者を求め給ふ。押勝其仁小當シらトも。道鏡れやよく是小叶テりト有レ。餘ある事ニ思ハれト傳ヘ有ル事ニや。女を殊ニ姪心深きものニもハまシ佛説の如きト。御言ノの如く餘ある妄語あり。然レもハかク崇メ此有リしは。釋魔ニ態あり。護法神といふ物や。其あり。其由を次く小云ふを見るハし。

釋玄賓は大僧都ありて。當時上下ニ大徳と稱せられ。法師の淨

行を云ふハ。必ズ例ニ引出らル人ノ形ニ小。大納言ノ人ノ北ノ方ニ懸想シてハ惱ム煩シ。

今昔物語集。古事談撰集抄。長明發心集ニ小。昔玄賓僧都と云人ノ有リ。山階寺の止事ニき智者ノ依リ。世を厭ム心深くテ。寺の交ヲを好ムまシ。三輪河の邊ニ僅ニある草菴ニ結ビ住リり。桓武帝の御時。此事を聞食シて。強ク召出リまシば。遁ルべき方ニれク。愁ム小參リり。然れトも猶本意ニらズ思ヘけるハ小や。奈良帝の御世ニ。大僧都小成給ルるハ。辞申ヒて。三輪川の清キ流ヲ了ス。起テし。衣の袖ヲを又モ汚カじト。詠テ奉ル。弟子從者ノも知ラず。何地ニもハなく失ハりテ。其後年



來<sup>ゴ</sup>經<sup>ヘ</sup>て。越<sup>コシ</sup>路<sup>ヂ</sup>此<sup>コ</sup>河<sup>カ</sup>の渡<sup>ワタ</sup>守<sup>モリ</sup>と<sup>カ</sup>りて居<sup>イ</sup>りしを。弟子<sup>シシ</sup>ある僧<sup>ソウ</sup>の。此<sup>コ</sup>を<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>ると<sup>カ</sup>見<sup>ミ</sup>付<sup>ツ</sup>くと<sup>カ</sup>しう<sup>バ</sup>。又<sup>タ</sup>立<sup>タ</sup>去<sup>サ</sup>りて後<sup>ノ</sup>。伊<sup>イ</sup>賀<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>小<sup>コ</sup>。或<sup>シ</sup>郡<sup>クニ</sup>司<sup>シ</sup>が家<sup>ウ</sup>の馬<sup>ウ</sup>飼<sup>カヒ</sup>とありて。年<sup>トシ</sup>來<sup>キ</sup>經<sup>ル</sup>る程<sup>ハ</sup>。郡<sup>クニ</sup>司<sup>シ</sup>罪<sup>ツミ</sup>有<sup>リ</sup>て處<sup>ト</sup>を逐<sup>ス</sup>はる<sup>カ</sup>しとて。歎<sup>ナガ</sup>き<sup>サ</sup>る<sup>カ</sup>を。慰<sup>ナ</sup>めて京<sup>キョウ</sup>小<sup>コ</sup>伴<sup>トモ</sup>ひ。此<sup>コ</sup>時<sup>トキ</sup>伊<sup>イ</sup>賀<sup>カ</sup>國<sup>クニ</sup>を。昔<sup>ムカシ</sup>知<sup>チ</sup>る大<sup>オホ</sup>納<sup>ノウ</sup>言<sup>ゴン</sup>ある人<sup>ヒト</sup>の。給<sup>タマ</sup>て有<sup>リ</sup>しう<sup>バ</sup>。其<sup>ソノ</sup>へ行<sup>イ</sup>きて。郡<sup>クニ</sup>司<sup>シ</sup>の罪<sup>ツミ</sup>を許<sup>ユル</sup>し給<sup>タマ</sup>はせしれど。淨<sup>ジヨウ</sup>行<sup>ギョウ</sup>此<sup>コ</sup>例<sup>レイ</sup>も引<sup>ヒキ</sup>出<sup>イ</sup>せられど。是<sup>コレ</sup>よ<sup>シ</sup>後<sup>ノ</sup>の事<sup>コト</sup>や。發<sup>ハツ</sup>心<sup>シン</sup>集<sup>ツク</sup>小<sup>コ</sup>記<sup>キ</sup>せる事<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>。其<sup>ソノ</sup>を此<sup>コ</sup>僧<sup>ソウ</sup>都<sup>ト</sup>を忌<sup>イミ</sup>しく貴<sup>タカ</sup>き人<sup>ヒト</sup>とて。高<sup>タカ</sup>きも賤<sup>イソレ</sup>まも。佛<sup>ブツ</sup>の如<sup>ニ</sup>く思<sup>オモ</sup>ふ<sup>カ</sup>りる中<sup>ナカ</sup>。大<sup>オホ</sup>納<sup>ノウ</sup>言<sup>ゴン</sup>ある人<sup>ヒト</sup>。年<sup>トシ</sup>來<sup>キ</sup>殊<sup>コト</sup>小<sup>コ</sup>相<sup>サウ</sup>憑<sup>トモ</sup>給<sup>タマ</sup>りける。僧<sup>ソウ</sup>都<sup>ト</sup>をよはうとれく惱<sup>ナヤ</sup>みて。日<sup>ヒ</sup>頃<sup>ゴロ</sup>もれりぬ。大<sup>オホ</sup>納<sup>ノウ</sup>言<sup>ゴン</sup>覺<sup>オホ</sup>

束<sup>ツカ</sup>あさの餘<sup>アト</sup>少<sup>オチ</sup>小<sup>コ</sup>。自<sup>ミ</sup>渡<sup>ワタ</sup>り給<sup>タマ</sup>ひて。何<sup>ナニ</sup>ある御<sup>ミ</sup>心<sup>シン</sup>地<sup>チ</sup>小<sup>コ</sup>う<sup>ウ</sup>など。細<sup>ホソ</sup>やう小<sup>コ</sup>訪<sup>トモ</sup>給<sup>タマ</sup>ふを。近<sup>チカ</sup>く寄<sup>ヨリ</sup>給<sup>タマ</sup>へ。申<sup>マウ</sup>侍<sup>シ</sup>らむと有<sup>ア</sup>れを。異<sup>イ</sup>く<sup>テ</sup>指<sup>サシ</sup>寄<sup>ヨリ</sup>給<sup>タマ</sup>ふるよ。忍<sup>ニシ</sup>びて聞<sup>ク</sup>也<sup>ナリ</sup>。誠<sup>マコト</sup>小<sup>コ</sup>を殊<sup>コト</sup>外<sup>ト</sup>病<sup>ヤメ</sup>も侍<sup>シ</sup>らむ。一<sup>ヒト</sup>日<sup>ニチ</sup>殿<sup>テン</sup>の御<sup>ミ</sup>許<sup>ヨリ</sup>へ詣<sup>マデ</sup>りし小<sup>コ</sup>。北<sup>キタ</sup>方<sup>カタ</sup>の形<sup>カタチ</sup>いと目<sup>メ</sup>出<sup>デ</sup>度<sup>ト</sup>と見<sup>ミ</sup>給<sup>タマ</sup>へ。し<sup>シ</sup>城<sup>シロ</sup>。髣<sup>ホノ</sup>髴<sup>カ</sup>小<sup>コ</sup>見<sup>ミ</sup>奉<sup>ホウ</sup>てのち。物<sup>モノ</sup>覺<sup>カ</sup>え<sup>ズ</sup>心<sup>シン</sup>惑<sup>マド</sup>ひ。胸<sup>ムネ</sup>塞<sup>ササ</sup>が<sup>テ</sup>て。何<sup>ナニ</sup>小<sup>コ</sup>も物<sup>モノ</sup>の云<sup>イハ</sup>れ侍<sup>シ</sup>らぬあり。此<sup>コノ</sup>事<sup>コト</sup>申<sup>マウ</sup>ふ<sup>カ</sup>りて。憚<sup>ハガ</sup>有<sup>リ</sup>れど。深<sup>フカ</sup>く憑<sup>トモ</sup>奉<sup>ホウ</sup>りて久<sup>キウ</sup>しく成<sup>ナ</sup>ぬ。争<sup>マカ</sup>うは隔<sup>ヘカ</sup>奉<sup>ホウ</sup>らむと思<sup>オモ</sup>ひて。亦<sup>モト</sup>むと聞<sup>ク</sup>也<sup>ナリ</sup>。大<sup>オホ</sup>納<sup>ノウ</sup>言<sup>ゴン</sup>驚<sup>オドロ</sup>き<sup>カ</sup>ふ。何<sup>ナニ</sup>うとく宣<sup>ノボ</sup>さ<sup>ズ</sup>し。最<sup>イソト</sup>安<sup>ヤス</sup>た事<sup>コト</sup>れ也<sup>ナリ</sup>。速<sup>タビ</sup>く御<sup>ミ</sup>惱<sup>ノウ</sup>を止<sup>ト</sup>めて渡<sup>ワタ</sup>り給<sup>タマ</sup>へ。何<sup>ナニ</sup>小<sup>コ</sup>も宣<sup>ノボ</sup>は<sup>ズ</sup>む。便<sup>マ</sup>よ<sup>ク</sup>計<sup>ケ</sup>らひ侍<sup>シ</sup>らむとて。歸<sup>カエ</sup>り給<sup>タマ</sup>ひ。上<sup>ウ</sup>小<sup>コ</sup>かくと聞<sup>ク</sup>え給<sup>タマ</sup>ふよ。更<sup>さら</sup>も



正あれ免子仰られむや。最淺間しく心憂られど。かく懇  
小覺し計ふ事あまは。あぞ辞給はむ。其用意して。僧都が正  
按内せさせ給へる小。最う依をしく。法服正志くして來り  
給へぬ。異しく實く志から交覺ゆれど。間れど立て。内る様  
ある方小入を給ふ。上の美しく取繕ひて居給へるを。一時  
はう正扱ぐぐ。守正て。彈指をそ度く志り依。斯て近く  
寄こと無て。中門れ廊小出で。物なれむか扱て帰り小け  
まは。主いよく。尊み給ふ事限あし。不淨を觀じて。其執を  
ひる返るる治し。此觀を人身の汚穢しき事哉。思ひ解く  
佛の教あり。若人の為小も愛著し。自も心有らむ時を。必此

相子思ふ治しと云へ。大方人の身は。骨肉れ操り朽るる  
家の如し。六府五藏れ有狀。毒蛇れ蟠る小異あら。血を體  
をう依をし。筋を治ぎ目成扣す。僅小薄き皮一重覆へ  
る故小。此諸の不淨を隠せ。粉を施し薰物をう治せ。誰  
うは偽れる飾と知ざ依。海小求免山り得る依味も。一夜經  
ぬまを悉く不淨を成りぬ。云は。繪かける瓶小糞穢を入  
れ。腐るる體り錦を纏へるが如し。譬大海を傾けて洗ふと  
も。清淨べうら。若梅檀を焼て白はまとも。久しく香しか  
らじ。況むや魂去。壽盡ぬる後を空しく塚の邊小捨べし。  
身脹れ腐り乱して。終小白き骸と成。眞れ相を知る故り。



念く小是を厭ひ。愚ある者は。假の色小耽りて。心ココロ惑トドを  
ちと。譬タトへを。廁カハヤ中の虫也。糞穢を愛するが如し。云コト云コトり  
有ア。篤胤今按オモふ。不淨觀の事。かく言痛く云へまとも。此  
を言小云。此コノみよて。更イタツラフ小驗シなき徒事あり。然サるはかく觀じ  
て。心の解トクる物小し有らむ。玄賓僧都。うレ北キタ方カタ再マタ見ミえに  
とも。前サキ小見ミて戀コヒ心の起オコれる時トキ。病ヤミツク付ツはらるル。思オモひの疑ウタガ  
し時トキ。此觀を為ナシて其心を解トクべき小。いらるル觀ミれども戀  
心ココロ此解トクざらし故ユ。堪タぬレ糸イトて。大納言小云。予コノと聞キれむ。  
相見アヒては倍ツく小。戀コヒゆる心ココロ増マりル免ムせ。然シカにカ。本意は  
遂トげて小。此觀を為ナシて。心解トクるル。狀サマ持モチ成ナりル。或シ禪僧

此態コノとて。人の骸骨をかきて。骨ホネ隱カク皮カ小は誰タレを迷マヨふらむ。  
皮破ヤまらはかくる姿スガタよ。といふ歌を書カキる有ア。此も不淨  
觀の心ココロ免ムせ。死シ後ノチの骸骨カガク此狀サマを思オモひて。現ウツクるル美ウツクしル死  
免ムを美ウツクしと思オモへぬ理リを。決ハてテ無ムきル事コト。其レを美ウツクきル食  
物モノも。食クひテ後ノチは。糞クソとある事を觀ミじル。ととも。美ウツクきル味アジを失ウツク  
はかずると同じノ理リあり。此レを思オモへむ。俗ヨの口詠クチヤク小。百骨ヒャクボネと觀ミ  
あらるルも美ウツクしルやと云へ。依ヨるル中ノ小面白オシロイかりル。梵網經  
古迹と云書ク。此身不淨累骨所成。血肉便穢薄皮所持。種タネ  
臭穢九孔流漏。不淨似淨。謂皮上分白膏。熱血交所重映。誑ウソ心ココロ  
媚眼メイガン種タネ。燒害ヤクガイ然シカ諸シヨ愚夫ウツク曾ソノ无ム厭ウツク背セ。云コトと見え。まま真言マコトの



密法子。男女の鬪鬪を合せ。壇におき。彈指して觀ぜる法有  
りと聞ゆれど。上小論する如く。形は採る小足らぬ。さて  
此大納言は誰ありむ。何子。或信じて。とも。其北方  
をそれ小逢しめむと為るは。物子狂ふ事あり。只不淨觀  
れみ為る故。事無れど。誠小加の不淨行を行ひ。らむ  
小も。其を見おろす有む。甚もをこれる大納言小在り。依  
りて古今集小。山田守る僧都の身。去る哀れ。秋果ぬれむ  
問人も。然し。といふ歌を。彼僧都れといふ。此實あらは。後子  
を人子嫌はれし故の述懐ある信し。發心集小。雲風の如く  
遷ウツリ行ユキりせば。田れと守る時も有る小や。と有むと。然る

心ココロは非ヒず。山田守と云イハしは。山田曾保登小。僧都を係カケする  
意あり。然れむ。いふ小道德トクデ顔ガハし。とも。釋子シヤクシ子コ心ココロを許ゆるす  
天まじり物ありり。

金剛山キョウガンサン行ユキ住スミける聖人セイジンを。御門ミカドの御妃ミサキ小愛著アイシヤク心を發オコし。現  
小妖魔アヤシと成ナリて。燒乱ヤクランせり。其は今昔物語集小。天狗燒乱テングヤクラン語と  
いふ條子。文徳天皇の女御メノミ。物氣モノキ子煩ワザワザひ給たまりれむ。其世小驗有  
る僧を召集ツグヒめ。様々さまざま此御祈ミコガネ。修法有ユフホウり。まとも。露ツユの驗ありし。  
此妃ミサキ哉ナニ本書小。深殿フカノ后ミコと有れど。彼皇后ミコノミ小を御ミまら。贈正  
一位良相公イヒタラナリノミヤウキミの御女メノメ子コ。多賀タガ幾キ子コ也ナリ申まをひ女御メノミあり。其由シユ下  
小注シヨウふを見て知べし。此をまゝ本書小。后ミコと有むと。女御



と記し於。

而る小大和國葛木山の頂小。金剛山といふ山。一人の貴妃  
聖人住り。年ぶろ此處より行ひて。鉢を飛して食をたぎ。瓶を  
遣て水を汲む。かく行ひ居る程。小。驗竝あり。然れど其聞  
え高く成り。是の

鉢を飛し瓶を遣るを幻術あり。其由別小記せる物あり。此  
て此聖人の名は何と云らむ傳ちらば。

天皇の由を聞食して。彼を召て祈しめむと思食して。召彦  
た由仰下されぬ。

天皇を文德天皇あり。此事は此天皇の末世小有し事ありて。

元亨釈書に考ふ所。天安二年此事と通えり。此はど國  
史小記され。其は此書の下文より云如く。極めて便なく。憚  
ある事ありは。あるべし。

使聖人の許より行て。此由を仰せらる。聖人度く辭し申せども。  
宣旨背き難たり依て。遂小參りぬ。御前小召て。加持せし免給  
ふ。其驗新小して。女御の一人此侍女忽小狂ひて。哭嘲りり  
走叫ぶ。聖人弥く加持せらる。小。女縛せらる。打責らる。間。懷  
中より一の老狐出て。轉びて倒れ臥す。其時小聖人をもて。狐  
を撃つ。免て。此を教ふ。

老狐此人を託し。事の物小見。始あり。此を教ふと



を人小託する事也。畜類と云て有まじ此事の理れどを言  
誨せるを云ふや。

女御此病一兩日の間小止給ひぬ。父良相公此字喜び。聖人  
暫く候べき由を仰せ給へむ。仰小隨ひて暫く候ふ間。夏  
の事ふて。女御を御單衣ばうを著給ひて御ける。御几帳  
此帷を風の吹返しとる。迫より。聖人髷ふ女御を見奉り。見  
習はぬ心。端正美麗の姿を見て。聖人忽ち心迷ひ肝碎りて。  
深く女御を愛欲此心を發しぬ。然とも為べき方なく。思ひ煩  
ひて有る。胸に火を燒ぐ如ふて。片時を思過る。思えぬ。  
遂小人間を量りて。御帳の内に入て。女御の臥給へる御腰

抱付ぬ。女御驚き迷ひて。汗水小成て恐給へども。御力小辞得  
が。然れむ聖人力成盡して。燒し奉る。女房ち此を見  
て。騒ぎ喧依時。侍醫當麻鴨継と云者。宣旨を奉りて。女  
御の御病を療治せむ。為小。宮の内小候。殿上の方。小。  
俄に騒ぎ喧る音し。驚きて走入る。御帳内より  
此聖人出。鴨継聖人を捕りて。天皇小此由奏。天皇大  
小怒給ひて。聖人を搦めて。獄に禁せらる。ぬ。

文徳天皇御紀。齊衡三年二月辛巳。當麻真人鴨継。為典藥頭  
侍醫。筑前介如。故と見也。されど心得が。此事有り。其由下  
子云ふを見る。し。



聖人獄ニ在リて。更ニ云フ事無シして。天ノ仰ギて泣ク誓ヒ云ク我レ忽シ死シて鬼ト成リて。此ノ女御ノ世ヲ在ハさむ時ニ。本意ノ如ク女御ヲ睦ムひ奉ラむと云フ。獄司ノ者此ヲ聞テ。父大臣ニ此ノ事ヲ申シ。大臣聞驚む給ヒて。天皇ニ奏シ。聖人ヲ免シて本レ山ニ返シ給ヒ於テ。然レを聖人本レ山ニ歸リて。此ノ思ヒ小レ堪ハずして。女御ノ馴ナ近ク付キ奉ルべき事ヲ強ク願ヒて。憑ル所ノ三寶ヲ小祈請ト云フとも。現世ノ其事ヤ難クりりむ。本レ願ノ如ク。鬼ニ成ルむを思ヒ入テ。物ヲ食ガりりれば。十餘日ヲ經テ餓死スり。其ノ後忽シ小レ鬼トありぬ。其ノ形身ヲ裸シして。頭ヲ禿スる。長八尺許ノ小レして。膚ハ黒キこと漆ヲ塗ルるが如シ。目は錠ヲ入

るが如シて。口廣ク開テ。劔ノ如クなる齒ヲ生ズり。上下ノ小レ牙ヲを食シ出シ。赤キ榕ノ衣ヲ搔テ。腰ノ槌ヲ差ズり。此ノ餓鬼ハ女御ノ御マ儀ヲ幾帳ノ喬ニ立ツり。人々現レ此ヲ見テ。皆魂ヲ失ヒ。心ヲ迷ハして。倒レ迷ヒて逃レぬ。女房ノあどは此ヲ見テ。或ハ絶エ入り。或ハ衣ヲ被テ臥シぬ。而シて間ニ此ノ鬼ノ女御ヲ懐キて。狂クし奉リまば。女御ノを吉ク取リ躑ビて。打ツて。扇ヲ差シ隠シて。御帳内小レ入給ひて。鬼ト二人臥サせ給ヒりり。女房ノあど聞リれむ。只日ヲ來戀しく。佗ニて於テ事共を。鬼ニ申スる。女御モ咲嘲らせ給ヒれむ。女房ノち皆逃去りり。

三寶ノ驗大要加くノ如シ。諸ノ人ヲは。有ハるハ。鬼ト見



もれど。女御小美カミ一死男小見えミらむ故ユ。かく姪ミヤれらる  
御行ミコひた。有アしと通ツえトとて。

良久ヤウキウしく有アて。日暮ヒクる。程マ小。鬼御帳オニミョウチヤウあり出デて去サりまむ。女  
御何メノ小成ナらせ給タマひぬらむと思オモひて。女房メノさち急イッぎ參マりれば。  
例タトヘ違ヒふこと無ナして。然サレ事コトや有アらむと思オモ召メと依ヨ氣キ色シキも無ナ  
て。居イさせ給タマける。少オホし御眼ミメ見ミぞ。怖オホし氣キある氣付キツせ給タマひ小  
りる。此由コトを内ウチ小奏ミラシりれむ。天皇キコウ聞キ食シして。奇キ異イく怖オホし死シより  
も。何ナニ成ナせ給タマふむらむと。歎イタりせ給タマふ事限カキれし。其後キノチ此鬼  
毎日ヒト小同トじ様サマ參マる。女御メノまま心肝シンカも失ウシ給タマはむして。現ア心シン  
えれく。此鬼コノオニを媚メしき者モノ小思オモ食シふりり。然サレれを宮内ミヤノウチの人ヒト皆

此コノ子コ見ミて。哀アハレ小悲カミしく。歎イタき思オモふこと限カキあり。而シテる間マ子。此鬼コノオニ人  
小託カりて云イハく。我ワレのれらら。彼鴨カモ繼ツグが怨ウラミを報ウラむと。鴨カモ繼ツグ此  
を聞キて。心ココロ小恐オホ怖オホる。間マ。その後キノチ後程コトを經ヘぎして。小はあり死  
りり。まま其男コノオトコ三四サンシヨウ人ヒト有アしも。皆みな狂病キヤウビョウ小て死シりり。

鴨カモ繼ツグを。清和セイワ天皇テウ紀キ。貞觀テイカン十五年三月八日シユウゴの下シタ。從シヨク四位下  
行イ主殿ヌシノミヤ頭カミ兼カミ伊豫イヨ權ケン守シ。當トキ麻マ真人マヒト鴨カモ繼ツグ卒スとあり。然サレる小此妖コノオニ  
事コトハ。天安二年テンアンニニの事コト小て。貞觀十五年テイカンジウゴあり。十六年ジュウロクニ前マ乃事コト  
あれむ。極キハめて餘人コトヒトありらむ。

然サレまば天皇テウ竝ナリり父大臣フチウジン。此コノを見ミて極キハく恐オホ怖オホれ給タマひて。諸モロの止ト  
事コトれき僧共ソウトウをもて。此鬼コノオニ城降シヤウ伏フツせむ事コトを。懃ネモツロ祈イらせ給タマひる



小。様々の御祈共此有りる驗小や。此鬼三月許を不參りまは。女御此御心も直りて。本の如く成給ひけまは。天皇聞食し喜むせ給ひて。今一度見奉らむとて。女御宮子行幸有りり。例より殊る。哀れ御幸ありとて。百官これ仕とりり。

此の文勢を見る小。今度の御幸は。此女御のかゝる嬖乱小逢給まむ。以來は御幸れらじと。思食し定給ふ物あら。然まが小哀し思食は方はありて。一期の見納えとも思食して。入御あらせ給へると知まじり。最哀ある御事ありかし。天皇既宮小入らせ給ひ。女御を見奉らせ給ひて。泣く哀ある事ども申させ給ふは。女御も哀小思食より。形も本の如く

小て御ま。而る程小例の鬼。俄小角より踊り出て。御帳の内に入りり。天皇此を奇異と御覽まする間。女御例の有様小て。御帳の内より急ぎ入て給ひぬ。暫計有りて。鬼南面小躍り出ぬ。大臣公卿より始えて。百官これ現小此鬼を見て。恐れ迷ひて。奇異と思ふ程。女御ま。取次きで出させ給ひて。諸人の見る前小て。鬼と臥させ給ひて。艶く見苦き事をぞ。憚る處もれく為させ給ひて。鬼起小りまは。女御も起て入らせ給ひぬ。天皇為べき方れく。思食し歎たて返らせ給りり。

我が天皇命はしも。挂卷を畏き。天照大御神の美麻命。御まして。其大宮を。大御神と共殿小。御座はべき宮小し。



む。假かりも穢キナキき法師あどをば。近チカツテ付給ふまじ死事ある効用  
明天皇の御世シ。聖徳太子と蘇我馬子が心とちて。豊國トヨクニの  
名もれき法師を。禁裡ミヤヌチ入給へるよ。事始コトまりて。後ノチくそ  
然サる古れ道ミチなむ思召シさ。天神地祇の御政事ミツリゴトをば。麁略オロソカ小  
成ナリ給ひ。何事小付ても。法師を召メて物せさせ給ふ事と成  
る。しうは。皇神等スメガミタチの御守り薄ウスく成し故小。をもれきむ。法師の  
大妖事オホアヒコトは逢給ふこと多く。斯有カレいみじき妖魔の燒乱ヤクランをさす  
小。受給ウケふ事も有し。悲カナシとも悲しむ。非ヒざらめや。  
然シカば止事ヤムゴト無らむ女人は。此事を聞て。專モト小法師をば。近付べ  
うら。此事極キハ免て。便ツなく憚ハヤリア有る事あれども。末世の人シ小

見しめて。法師フシ近付うむ事を。強ツヨク小誠マコトめむが為小。かく語り  
傳ふと有。己。

末世此人シ小見し免て。法師フシ近付うむ事を誠免む也。加  
く憚ハヤリア有る事をし。秘カクさば書殘カキノコされ。撰者センシャの心ココロを。最イトも  
頼タもし。かみり。上カミある玄實僧都ゲンジツソウが。下シモに記せる志賀  
寺の上人。清水寺の光別當ミツノミツが事。思オモひ合アはべし。  
是よ。後此事ノチも。宇治拾遺物語ウヂシユイモノガタリ。女御物氣メノモノキ小惱ナドみ給タるを。  
本書小。此コノ染殿シヅメ后ノと有。ま。誤アヤあり。そは下シモに。元亨釈書ゲンキウシヤクショ。故  
引ヒキて注ツを見て知チる。考カウし。

或人シ申けるを。慈覺大師ジガクの弟子シシ小。無動寺ムドウジの相應和尚オウソウと申マす







其を古事談小。文範、民部卿の餘慶僧正を貴た驗者とて、  
人此妻を犯さゆくと云れりるを。僧正此由を聞て忽小  
民部卿の許に渡られり。主其心を得て、所勞の由云て  
會さざればは、僧正大事ある事。自聞えむと有りれど。出さ  
ざりる時小。然らむ投出せと加持せられれば、屏風の上  
より投出して、惑ひむく免れりる時。僧正さあそとて歸ら  
せけり。民部卿を三日許死するやうにて、惱み臥せり。是  
是小因て、子とも二人を僧正小奉りて、免されて命生小け  
りと有り。大く世に驗者と稱ゆ。僧らは、かゝる幻術を  
用ひて、異驗を見ゆるなり。此事を十訓抄小も記せる

を。校合せて舉ると。○校者等云く。此、民部卿の言小。餘慶僧  
正を驗者と云ひて、人此妻を犯さるゝ歎と云れざるを思  
ふは、其頃此僧徒の驗徳とくと聞ゆ。依者も、其小事託せて、  
姪事を行ふが多かる故。然云れざる事を思はる。抑此  
僧正小。さる事有や無しや知らぬと。此前後に舉られざる。  
名僧大徳と聞えし。法師等此事を思ふも、世小語り傳へ  
ざる濫行の殊多有りむこと。推量されたり。但し彼善珠  
僧正此如き。正しく孽子と知れらむを。然ても有あむ。若  
も其事の知れざらむは、人の血統も乱る。いさぐ重  
き枉事あるを。世此人。僧とし云へむ老少を云え。其の



馴近チカ於カくを忌イミはしとも思オモをぢるは。深く彼道カミチ小誑コト惑ドク色シキら  
れあるが故ユヰあり。返カヘまぐ異アラしき驗ケン徳トクありかし。偕サテ此コノ民部  
卿キョウ。この事コト小コ心シン著ツカれ。依ヨを然サる事コトあれど。元モトより學ガク力リキ薄ウスく。  
其タビ魂タマれ居スて固カタからざる故ユヰ。妖僧ヤウソウの幻術マギ。屏風ビョウブの上ノよ  
投ナゲ出ダシさせ。三日サンニチが程ケ辛カラ死シ目見メミけ。剩アトさへ己ミが罪ツミとや思オモを  
れりむ。子コ等タチ二人ニヒトを法師ホウシ小コ成ナレて。其コノ由ユヰを謝アヤされ。事コトと聞キ  
あるは。いと怯オソく。片腹痛カタハライタき事コト小コころ。

其ノチ後ノチ和尚オウソウ罷カて出デるを。志シはし候サへと止トむれども。久キウしく立タて  
腰痛コシイタく候サとて。耳ミミも聞キ入イまじ出デぬ。女御メノミを投ナゲ入イられて後ノチ物モノ  
氣ケさえて。御心ミココロ地チさはやりよ成ナレ給タマひぬ。驗ケン徳トク新アラタありとて。僧都ソウト

小任コト者モノ傍ナリき由ユヰ成ナレ。宣ノリ下ゲせらゆれども。箇カ様ヤマの加カくぬ。何ナニ條ジョウ僧ソウ綱カウ  
成ナレべニおせて。返カヘし奉ホウると有アル也ナリ。

深殿フカテン后ノチの眞マコト濟ジ僧ソウ正マコト此コノ靈レイ小コ。惱ナドされ給タマひし事コトを。下シタり舉アゲる如ノチ  
く。諸書シヨショ小見コミされど。金剛山キョウガサン此コノ聖人セイジンの靈レイ小コ。燒ヤク乱ランせらま給タマひ  
し事コトは。今昔イマキ物語モノガタリより外ソトに所見ショケンあり。爰コノ元亨ゲンケウ釈書シヤクショあり。相  
應オウ和尚オウソウ傳デンを考カウふる小コ。天安二年テンアンニネン藤フジ妃ヒメ名ナ多賀タカ幾キ子コ。良相リョウサウ女メ。嬰オウ  
狂病キヤウビョウ。方方フウフウ不フ愈ユ。藤公フジキミ延ノボ應オウ入イ宮ミヤ。妃ヒメ隔ヘ屏ビョウ而シテ臥シ。應オウ持テ呪ノリ。不フ久キウ神カミ  
擲シ妃ヒメ於ニ屏ビョウ外ソト。飛ト而至ニ應オウ前マエ。舉テ聲コエ呼コ。應オウ曰イハレ可カ還ヘ本ホ所トコロ。妃ヒメ騰ト飛ト入イ  
帳テ中ナカ頃刻ケウカク靈レイ託トク妃ヒメ陳謝チンゼ。狂病キヤウビョウ速息ソクシキ。貞觀三年テイケンサンネン藤フジ妃ヒメ又マタ病ビョウ。藤公フジキミ又マタ  
召メ應オウ。應オウ加カ之ニ便ニ愈ユ。藤公フジキミ大悅ダイエツ。與ヨリ巴子國ハシノクニ寶劍ホウケン。是コト從シテ唐國テウクニ所ヨリ送シ持テ



爲奇實者也と有之。是正了宇治拾遺の事實小同じ。此後、深殿、後の事は。此後の事とあて別り記せり。然れむ今昔物語。宇治拾遺小。深殿、后と有之。良相公は御女。多賀後子の事を事實に似たる故小誤れるなり。相應を慈覺大師は弟子ぬるが。良相公は代りて。剃髮せ依僧小て。其薙染の時。師告て。藤公索度者。是汝良縁之相應也。今名汝以相應。蓋取藤公一字也とて。負する由あれむ。旁く由ある事あり。天安二年。此年の八月小。文徳天皇崩御ありしが。其前後小。深殿、後の悩み坐る状。國史も見えぬ。多賀後子を女御は御けとば。元あり其事の見えざる。然るべき事あり。

釋眞濟を僧正あり。深殿、后は想を懸て。妖魅とありて悩まし奉り。其を古事談小。貞觀七年のあり。深殿、大后天狗の爲小悩まれ。稍數月を経る小。諸有驗は僧侶。あへて能く此を降は者あり。

深殿、皇后を。文徳天皇の御后。清和天皇は御母は坐まし。御名を明子を申し。大政大臣良房公の御女あり。深殿を處名小て。正親町の南。京極は西小在り。便良房公の家れりと。拾芥抄は見えたり。此、事元亨紀書を始め諸書小。寛平五年の事とせり。孰し是ある事を知らざ。

天狗故言して云く。三世の諸佛は出現小非。誰は。誰は。我を降



さむと。爰コト小相應和尚召メシ小應じて參入し。兩三日祇候されども其驗有カこせれし。本山カ還カ。無動寺の不動明王小對し奉マツ。事由コトを啓マツ白マツして愁懷祈請ネガフ。そ此時明王背ムクきて西カ向カふ。和尚隨ツひて西カ坐カ。明王カまカ背ムクて東カ向カふ。和尚カまカ東カ坐カ。明王忽タチ小背ムクて南カ向カふ。和尚カまカ南カ坐カして。涙ナミダを流ナガし合掌稽首カネして云く。相應明王カ字ナリ戴イき奉マツ。更カ他念カふし。而カるカ今何の過アチを犯カせカ。依事有カて。かく相背カ給マツふぞと。明王の本誓カを念カじて眼メ合カはカる間ホト小。

不動明王カ此本誓カと云。其一カ。見ミ我身カ者發ハ菩提心カ。聞ク我名カ者。斷キ惑カ修シ善カ聽ク我說カ者得マツ大智慧カ。知ル我心カ者即身成佛カ。其二カ。一カ

持ヒ秘密呪カ生カく而モ加護カ奉仕修行者猶如薄伽梵カと有カ。此事

谷響集カ小も見えと云。

夢ユメ小も非カ覺カるカ小も非カ。明王示シして云く。我生カく加護の本誓カよカとて去カぐとカ。此事カ有カ。今顯アるカ其本縁カを説カむ。昔カに紀僧正眞濟存生カのとき。我が明呪カを持カ。今の汝カが如カし。而カるカ小邪執カ也カ。天狗道カ小隨カし。本修カの功力カ小よカとて。皇后カ被カ逼カ惱カまカ。我カまカ本誓カ此カ為カるカ。彼カ天狗カを護カるカ故カ。汝カ小背カく。我が呪カを持カせむ。彼此カ同朋カあるカ。故カ。彼カ天狗カを縛カし難カ。然カれども汝堅誠カあるカ。故カ。我已カとを得カ。汝カ小祕方カ字カ示カさむ。汝宮掖カ小至カらカは。密カ小彼靈カ子語カれ。你カを眞濟カの靈カ小非カ交カやと。彼此カを聞カ



うは。必頭を低て恥澁ら幸。爾時小大威徳の明呪をもて加持せむ。加那ら交降伏を得む。我ま彼邪心を回して。正道小入ら免む也。

宇治拾遺物語。叡山無動寺の相應和尚也。比良山の西。葛川の三瀧といふ處も。通ひて行ひたり。其瀧にて不動尊小云りらく。我を負て都卒此内院。弥勒并の許。將行給牙と。強子申られむ。極めて難き事あれども。強子申あと。那れば將行べし。其尻を洗へと云りまば。龍此尻。水何み。尻よく洗ひて。明王の頭小比。都卒天小昇。爰子内院の額小。妙法蓮華と書き。明王云く。是へ參入の者

外は。此經を誦して入る。誦せざれを入ら。云戸を。遙小見奉上げて相應云く。我此の經を讀み。讀めども誦すること未叶む。と云戸は。明王。口惜き事あり。其義。參入叶。法華經を誦して。此參依べし。とて。搔負て葛川へ歸。相應泣悲むこと限。尊の前。尊今。無動寺小。等身此像ありと有。釈書小。此像也。貞觀五年の比。相應。等身の長小。自刻。世依由。深殿。后。此御所。彼方。此方。向。像。や。其。太。釋魔の憑託。然。異驗。有。れ



了。不動と云々。その陀羅尼祕密法。毘盧遮那佛之化身と云ひ。大威徳明王と云は。阿弥陀佛の化現ある由。真言の書ども小見えよるが。此二佛共小元よて有名無實あれむ。其像は憑物あくては斯る異験の有はくも非にまゝ若くは相應が心と。かく依事の有しと。妄話せるも知危うらま。法師の然る妄説ハ。珍有糸むれ也。

相應和尚おれ告を得て。感涙小堪む。頭面接足禮拜恭敬して。後日小召よて復參り。明王の教誡此旨小任せ。加持し奉る間。天狗を結縛せ也。今より已後まゝ來信うらまると。歸伏のめち。此を解脱しられむ。后は尋常小復し給也と有り。

真濟があと。清和天皇紀。貞觀二年二月二十五日の下。僧正傳燈大法師位真濟卒。俗姓紀朝臣左京人也。父巡察彈正正六位御園。真濟少年出家學大乘道兼通外傳。夙有識悟。從空海僧都受真言教。師監其器量。特加提誘。遂授兩部大法。為傳法阿闍梨。時年二十五。時人奇之。真濟入愛當護山高尾峯。不出十二年云々。天安二年八月。文德天皇寢病。真濟侍看病。大漸之夕時論嗽。真濟矢志隱居。遷化時六十一と見え。釈書小。真濟郷子。惟喬親王と惟仁親王と。位定めれ也。真濟も惟喬親王の驗者を承了。慧亮法師も。惟仁親王の驗者と成て。驗を抗りるも勝りて。惟仁親王儲君と成給へ也。清和



天皇是あり。あつゝ真濟大小志を失ひ。まゝ文徳天皇の看  
病小驗れきよ依て。倍々志を失ひて。隱居せる由を記し。ま  
と贊曰。真濟色小惑いて魅と成るとは。彼不平の時小當  
てて。偷小皇后の美色を眼て。所守を失ひあると云す。り。  
然る小本朝高僧傳。極め真濟が魔と成ると云す。世に  
浮説ある由を辨へしれど。此後延喜十一年の頃。玄昭と云  
る依僧の。亭子院にて修法のと。真濟が靈鵲と成て來れ  
るを。玄昭捕へて。爐に投じて。焼く依。まゝ怨を結ひて。異  
志き小僧に化して。空より降來る。玄昭法師此を見。心身  
悩乱し。依を。淨藏法師が加持して。彼靈を降伏せる。と。

淨藏が傳小見え。源平盛衰記ある。住吉を名乗れる物の言  
小も。柿本紀僧正大法慢字起して。大天狗と成り。是を愛  
宕山の太郎坊と申はと云ひ。雲景が未來記も。愛宕山に  
集ひて。世を乱さむ計りる天狗に中。太郎坊とて真濟  
も何。是字もて神社考ふ。柿本紀僧正入高尾峯起大慢心  
為太郎坊とは記さきし成べし。然るを澄圓僧が神社考志  
評論。此を辨して。既明王曰。回彼邪心令入正道。若爾真濟  
墮鬼趣得道者也と云すれども。玄昭法師が修法の處。至  
まは。是より遙後あるを如何せむ。不動明王。彼邪心を  
回して。正道小入しめむと云ゆとも。其を賴がと。然るは



其謂也。正道やがて釋魔の正道ある故。猶妖魅を脱す。其を此後も依然として。天狗此列小有を以て知べし。釋淨藏を世す。大德貴所を稱れと云。近江介中興が娘小奸とて眞弟子を生み。

今昔物語集。大和物語あどみ。近江介平中興と云人有けり。家豊ふして。子共數有りる中。一人の娘有り。年いまだ若く。形美麗。髪長く。有様微妙。うけれむ。父母此を悲ひ愛して。目を放たず。事もあてて。養ひる程。兵部卿宮れ。申り。依止事れ。又御子。まこと上達部。と。數夜這りれども。娘高ふ。とて。從ち。父母も。天皇小奉らむを思ひて。聳取を為

て。傳り。依小。此娘物氣。煩ひて。日來小成けれむ。父母此を歎き。旁に付て。祈禱共を為せり。其驗も無り。れは。思ひ。縋ける小。其頃淨藏大德といふ止事れ。き有驗の僧有。實に驗德新れること。佛の如く也。りれむ。世舉て。此字貴ふこと。限あり。近江介此淨藏を以て。娘の病を加持せさせむ。を思ひて。構りて。呼りれむ。淨藏行り。り。介喜ひて。加持せさせり。依り。即物氣。顯きて。病止小けむ。と。暫くは。此御あして。祈らせ給へ。と。父母強り云り。れむ。淨藏言ふ。隨ひて。暫く有りる程。驛に。此娘を淨藏見たり。依り。忽小愛欲の心發て。更小佗事。不思り。り。了。ま。娘も其氣色を心



得とめりる。然て日來成經る程小。何ある際う有けむ。遂う  
會<sup>アヒ</sup>けり。其後此事隱<sup>カク</sup>まると為れど。自然<sup>オノツマナリ</sup>人粗<sup>ホム</sup>知小りまむ。世  
小を聞えり。然れを世人此事を云<sup>イヒ</sup>繚<sup>ヒツ</sup>けるを。淨藏聞て。  
恥て其家小も行くに成ふりる。我かく依名を取。今は  
世小も有らじと云て。跡<sup>アト</sup>を暗<sup>クラ</sup>まして失<sup>ウセ</sup>り。悔<sup>クヤレ</sup>有ける小  
や。其後鞍馬山<sup>クラマ</sup>云處。深く籠<sup>コモリ</sup>居て絶<sup>タエ</sup>を行ける小。前生の  
機縁<sup>アリサマ</sup>や深<sup>フシ</sup>り。常小彼娘の<sup>アリサマ</sup>有状<sup>アリサマ</sup>思<sup>オモ</sup>出<sup>デ</sup>られて。心<sup>ココロ</sup>懸<sup>カ</sup>  
了<sup>コト</sup>戀<sup>コヒ</sup>しく思<sup>オモ</sup>けむ。行<sup>ユク</sup>ひに空<sup>ソラ</sup>もあくて耳<sup>ミミ</sup>有<sup>アリ</sup>り依程<sup>ヨシ</sup>。打<sup>ウチ</sup>臥<sup>カ</sup>  
ふりり依<sup>ヨシ</sup>が。起<sup>オキ</sup>上<sup>アガ</sup>て見<sup>ミ</sup>まは。傍<sup>タタラ</sup>小文<sup>フミ</sup>有<sup>アリ</sup>り。弟子<sup>シシ</sup>の法師<sup>ホウシ</sup>れ一  
人<sup>ソノタリ</sup>副<sup>ソノタリ</sup>有<sup>アリ</sup>ける小。此<sup>コト</sup>を何<sup>ナニ</sup>ぞの文<sup>フミ</sup>ぞと問<sup>ト</sup>りれむ。知らぬ由<sup>ヨリ</sup>を答<sup>コタ</sup>

けまは。淨藏文<sup>シヤウザウ</sup>を取<sup>トル</sup>て披<sup>ヒラ</sup>き見<sup>ミ</sup>る小。我<sup>ワレ</sup>が思<sup>オモ</sup>ふ人の手<sup>テ</sup>うて有<sup>アリ</sup>  
り。奇<sup>キ</sup>異<sup>イ</sup>と思<sup>オモ</sup>ひて讀<sup>ヨク</sup>めむ。かく書<sup>カキ</sup>る。墨<sup>スミ</sup>漆<sup>シツ</sup>に駿馬<sup>ウマ</sup>山<sup>ヤマ</sup>小い  
依<sup>ヨシ</sup>人<sup>ト</sup>を。返<sup>カヘ</sup>る。返<sup>カヘ</sup>て來<sup>キ</sup>あむと有<sup>アリ</sup>り。淨藏<sup>シヤウザウ</sup>此<sup>コト</sup>を見<sup>ミ</sup>る  
小系<sup>イト</sup>怪<sup>アヤシ</sup>く。此<sup>コト</sup>を誰<sup>タレ</sup>をも遣<sup>オクセ</sup>あるれら。持<sup>モチ</sup>來<sup>キ</sup>けき便<sup>タテマ</sup>もねむ  
え。奇<sup>キ</sup>異<sup>イ</sup>事<sup>コト</sup>うれと思<sup>オモ</sup>ひて。今<sup>イマ</sup>を此<sup>コト</sup>事<sup>コト</sup>止<sup>ト</sup>めて。偏<sup>ヒト</sup>小行<sup>ユク</sup>をせむ  
と思<sup>オモ</sup>ふ。形<sup>カタ</sup>不<sup>フ</sup>愛<sup>アイ</sup>欲<sup>ヨク</sup>の思<sup>オモ</sup>ひ小勝<sup>タマ</sup>びして。其<sup>ソノ</sup>夜<sup>ヨ</sup>忍<sup>シム</sup>びて京<sup>キョウ</sup>小  
出<sup>デ</sup>て。彼<sup>カノ</sup>女<sup>メ</sup>の家<sup>ウチ</sup>小行<sup>ユク</sup>て。構<sup>カマ</sup>へて然<sup>シカ</sup>くと云<sup>イハ</sup>入<sup>イ</sup>り。返<sup>カヘ</sup>りれむ。娘<sup>ヒメ</sup>竊<sup>ヒソカ</sup>  
小呼<sup>ヨブ</sup>入<sup>イ</sup>りて會<sup>アヒ</sup>り。然<sup>シカ</sup>てま。夜<sup>ヨ</sup>に内<sup>ウチ</sup>。鞍馬<sup>ウマ</sup>小返<sup>カヘ</sup>て行<sup>ユク</sup>  
けり。其<sup>ソノ</sup>れ不<sup>フ</sup>戀<sup>コヒ</sup>くて。女<sup>メ</sup>許<sup>カ</sup>小此<sup>コト</sup>を忍<sup>シム</sup>びて云<sup>イハ</sup>遣<sup>オク</sup>り。辛<sup>カラ</sup>く  
あて思<sup>オモ</sup>ひ忘<sup>ワスレ</sup>れ。戀<sup>コヒ</sup>し由<sup>ヨリ</sup>を。うめて啼<sup>ナク</sup>ける。鶯<sup>ウグイス</sup>の聲<sup>コエ</sup>と。其<sup>ソノ</sup>返<sup>カヘ</sup>事<sup>コト</sup>



小女こむすめも君志きみこころをけりかしの鶯うぐいすの啼なをききみや思おも出いべき。  
とれむ有ありれむ。浄藏じやうざう大おほく我われもえりおらき人ひとをば  
置おかから。何なにの罪つみある世よをば恨うらむ。とも云いひ遣やりり。此か様さま  
よ云いひ通とほり。度たく成なりれむ。此事このこと皆みな世よに聞きえりけり。  
然しかば此この娘むすめをば近江おんえ介すけ限かぎなく傳かたりて。女御にみよ子こ奉たてらむと思おも  
けれど。此このく聞きえふりれむ。親おやも知らずして。遂つひに見みや成な  
小こり。此この女むすめの心こころに極たぎえて慥まこときなり。浄藏じやうざう心こころを盡つくして云い  
とも。女用むすめもちぎらむ。は叶かなはず。然しかば心こころうら女むすめの身みを。  
徒いと成なり也なりとぞ。世よ人ひと云いひ繚たづりると見え。はら發はり心こころ集あひ。  
彼か浄藏じやうざうを。日本にっぽん第三だいさんの行人いんぎんあれやも。近江おんえ守まもり永とこ世よが女むすめ契あはり。

を結むすべ。久米くみ仙人せんじんを通とほり得えて。空そらを飛とりきりれど。下衆げしやう  
女むすめは物もの洗あらひ。脛ひざの白しろか。ける。小欲こよく發はりて。仙せんを退ひし  
て。只ただ人ひととある。ふけり。今いま世よも。手足てあしは皮かわを剥はき。指ゆびは燈ともしし  
爪つめを碎くだき。様さまは片輪かたわをちりて。佛道ぶつだうを行いふ人ひとを。其その發はり心こころに  
程ほども隠かくれど。妻子むすめこ成なりて。例たと多おほかりとも有あり。浄藏じやうざうを。  
三善さんぜん清行じやうぎやう第八だいぱちの子こめて。元亨げんきやう釈書しやくしよ。母夢ははのむ天人てんじん入い臥内ふしうち。而しか娘むすめ  
生な聰明ちやうめい無な雙ふた七歳しちさい求もと出家しゆがと有あり。いと弱よわかり。不測ふそくも法はふ驗げん有あ  
り。延喜えんぎの御世ごよに頃ころなり。活佛いげふの如ごとく稱いれ。る。小こ此このの如ごとく。今いま  
昔むかし物語ものがたり。此この女むすめの心こころに極たぎえて慥まことき由よし云いふ。と。女むすめは心こころを  
誘さひて。後のちも。男おとこも。深ふかり。何なにも思おもへ。大方おほは言い。



出がてよ思ひ惑ふを。男こそ。然しも深くは思てぬ物うち。  
假令<sup>カレシ</sup>此如くも誘ひ試るを常ある。然れを淨藏こそ慥<sup>シカ</sup>りれ。  
さ依を常小讀む法華經ゆも。女盡勿<sup>シ</sup>親近<sup>シ</sup>といひ。まゝ為<sup>シ</sup>法。  
猶不<sup>レ</sup>親厚。況復餘事とも有<sup>ル</sup>をや。凡て此物語小限らば。當時  
の習いとて。何の書小も。僧の行狀をば。悪<sup>ク</sup>事成も。悪うら  
ぬ様小論る事いと多かり。心ちて見<sup>ル</sup>べきあり。然を有れど。  
此も元より人子ぬるが。魔縁小引れて。幼<sup>キ</sup>より親子と成<sup>ル</sup>  
と。取外して人道の戀路小迷らむを。宜<sup>ク</sup>ぬる事あり。かく  
思<sup>フ</sup>手は。極えて慥<sup>シ</sup>とも思て交<sup>ル</sup>れず。此は此人けみぬらば。  
女<sup>ノ</sup>心を惑はしむ僧は。幸<sup>ク</sup>成て然<sup>ル</sup>こそ。謾<sup>カ</sup>小親氏の法

けみ執りて議まべからば。有驗の名高<sup>ク</sup>僧も。色小本心を  
乱<sup>ス</sup>せよといふども。本心城露<sup>ラ</sup>せよとよそ云<sup>フ</sup>法<sup>ル</sup>れ。形<sup>ノ</sup>大  
和物語。後撰集あや小。此女親<sup>ハ</sup>けなくぬ<sup>レ</sup>て後<sup>ニ</sup>。男と共に  
他國<sup>ニ</sup>小。はう<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>て住<sup>ル</sup>るを哀<sup>シ</sup>か<sup>レ</sup>て。平兼盛<sup>ヲ</sup>もち<sup>テ</sup>これ  
人目<sup>ニ</sup>まれ<sup>ル</sup>る山<sup>ノ</sup>さ<sup>ト</sup>り。家居<sup>セ</sup>むとは思<sup>ヒ</sup>きや君<sup>ト</sup>と詠<sup>テ</sup>  
遣<sup>リ</sup>ぬ<sup>レ</sup>む。返事<sup>モ</sup>せ<sup>テ</sup>よ。や<sup>ヲ</sup>泣<sup>キ</sup>る<sup>ル</sup>や有<sup>リ</sup>。發心集小。近  
江守永世の女と何<sup>レ</sup>ゆ。今昔物語。大和物語あ<sup>リ</sup>。近江介  
中興<sup>ガ</sup>娘<sup>ニ</sup>あるを。誤<sup>ル</sup>る<sup>ル</sup>あ<sup>ら</sup>べし。

釋道命は。阿闍梨と志<sup>テ</sup>。誦經第一と世<sup>ニ</sup>稱<sup>セ</sup>られ。其驗<sup>ハ</sup>炳然<sup>ト</sup>  
き人<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ル</sup>小。和泉式部小深く睦<sup>ミ</sup>ひ。



道命阿闍梨を傳大納言道綱の子にて天台座主慈惠大僧  
正に弟子あり。幼よと山小登りて法花經を受持す。初めは  
一年小一卷を誦して八年より一部を誦し畢依音微妙ゆし  
て曲を加ふ。音韻を致さばと云ふも。聞人耳を傾りて  
讚歎せむと云ふと無てしや。然れど色小耽る僧有り。和  
泉式部小通り。宇治拾遺物語古事談東齋隨筆れど小。道  
命或時式部がゆ行て臥し居る小。目覺て經を心を澄し  
て讀る小。八卷讀むる。曉り眠まむと爲る程小。人の氣  
はひの爲けれむ。彼は誰ぞと問られむ。己は五條西洞院に  
邊小を依翁ありと答られむ。道命おは何事侍ると云へ

は。今宵此御經を承給はせぬる事。生て世く忘がく侍る  
也云。られむ。道命法花經を讀ことは常此事あり。れど今宵  
しも言ゆぐぞと云へむ。五條に齋云く。清くて讀參らせ給  
ふ時を。梵天帝釈を始め聽聞し給へは。翁れども近く參り  
て承給たる事能は。今宵は御行水も候は。讀奉らせ給  
すは。梵天帝釈も御聽聞候てぬ隙。翁參りて寄りて承給  
せ候ひぬる事。忘がく候也と云りゆ。坐有。は。古  
今著聞集小。道命阿闍梨と。和泉式部也。一車ふて。せ。け。行  
り。道命後むきて居るを。和泉式部。などかくは  
居あるぞと云られむ。よしやよし昔やむうしいがとぞ。



あみも合れむねちまはるはまとも有り。ちて五條の齋とは謂ゆ。依五條の道祖神あり。此を眞の塞神は阿らで。後世に祭れる。漢土に卑れ鬼は依故。佛法を貴べる。妄語をむ放りるあり。斯る事ありや言出けむ。今昔物語集に。此僧法輪寺に禮堂に籠りて。經を讀り依ふ。一老僧も共り籠るが。其夢に。金峯山の藏王。熊野權現。住吉神。松尾神。ちて寄て。道命が讀經を聞給ふと見る由を記し。法花驗記には。殊に妄説を加へて。住吉明神向。松尾明神言。聞此經時。離生。業苦善根增長。仍毎夜所參也。松尾明神言。我有近所不。論書夜。常來聽經。如是稱讚。礼拜阿闍梨。ちといへ。驗記也。

今昔物語を取て記せる記あり。本書に見ざる妄語を加ふるあり。此を以て法師の記せる書を。殊に妄説多き事を知べし。れに今昔物語に。或女に託し依靈。道命が讀經を聞て。惡道を免れて。天上に生る由を云ふ事あり。其を佛法を信ずる。愚人の靈に常あれむ。怪む。足ら交。ちて此法師の死後。或人に夢に。大なる池の中。經を誦する聲あり。或吉聞る。道命が音あり。池中で見ると。彼阿闍梨船に乘て來て云く。我生る時。小禁戒を持て。天王寺別當の時。佛物を用ふ。依罪に依て。此池に住む。兩三年を還む。罪苦を畢て。都卒天に生るべしと云ふりと有るは。僧の靈に



常言れむを。怪む小足らむ。然れど天上の果は覺東れし。  
釋朝勸を。志賀寺に上人を聞えし。京極御息所。小想を懸  
て。ゆらむ玉緒の古歌を詠じ。

寶物集小。京極御息所と申は。左大臣時平公の御女あり。  
延喜に女御を參り給ふ夜。寛平法皇に。出立見むとて。御幸  
して見給はる小。御心よ著給はれば。老法師小給は。了ぬと  
て。押取給へ。依人の御事あり。此御息所志賀寺へ詣て。給け  
依を。寺に聖人見奉り。次日彼御息所の御許を參り。對面し  
給へ。了るるを悦びて。御手をとめて。詠侍り。初春に初  
子の今日に玉簾。手小執らる小。ゆらむ玉の緒と詠えて。今

生に行業を譲り奉依と云へり。と見え。盛衰記に。京極御息  
所。志賀寺詣のと記。彼寺に上人。心懸奉り。今生の行業を  
譲り奉らむと申せば。よし。ゆらは眞の道に志す。法して。我  
をいざれ。子ゆらむ玉の緒と。打詠め給ひて。御手を授け給  
ひら。了と有り。上人に詠する歌を。万葉集小。中納言家持卿  
の。正月初子に日小。玉簾を賜は。了る時。讀出らむ。古  
歌ある。我詠免出あるあり。宇治大納言物語に。寛平御門出  
家して。忌じう行をせ給はれむ。天狗の扱き參らせて。京極  
に御息所小ねとし。參らせけると有り。

釋善祐を。粟田口僧正に聞えし。二條后小密通し。







